

道

求



第
四
號

第
拾
卷

大正四年五月十七日發行(每月一、三、五、七、九、十一、十三、十五、十七、十九、廿一、廿三、廿五、廿七、廿九、卅一日發行)

求道第拾卷第四號目次

求道

◎一向專修と報謝經營

講義

◎『教行信證』信卷三信釋

近角常觀

第七席

信樂釋(釋文)

告白

◎よく／＼煩惱の興盛に候にこそ

北川齊次郎

講話

◎誠なるかな

(利井鮮妙師法話)

雜錄

◎茨木所感

近角常觀

◎信仰談話會質疑應答錄

每日曜午前九時

求道學舍

(本郷區藤川町一帯地)

每土曜午後二時

第二求道會

(九段坂佛教俱樂部)

每月二日午後七時

第三求道會

(日本橋區深町説教所)

(五月中休講)

六月一日求道學舍日曜講話ヨリ開始)

求道

第十卷
第四號

一向專修と報謝經營

一向專修といふことは、他力信仰に於て眼目とも云つべき最大要點である。法然上人が念佛をすゝめたまひたる主眼は、實に一向專修の念佛である。聖道門の外に淨土の一門を開闢せられたのも、此一向專修によりて成立つたのである。従つて法然上人はじめ親鸞聖人の流罪に處せられ給ひたのも、畢竟一向專修が禍をなしたのである。若し念佛を勧めたと云ふばかりであつたならば、必ずしも罪になる筈は無い。戒を持ち禪定を修して念佛を稱へよと云ふならば、決して流罪になる筈はない。然るに法然上人の勧めたまひしは、專修念佛である、一向一心である。聖道門を閉ぢ、自力を捨て、雜行を擱き、諸善を抛ち、一向に専ら無量壽佛を念ぜよと勧めたまひたのである。是が聖道諸宗の立場からは、一步も許すこと出来ぬ點である。如此く云へば一向專修といふことは、非常に自ら高しとして、他を容れざる狹隘なる思想の如く誤解し易

いが、決してさうではない、寧ろ自分の力の足らざる處を自覺したる信仰にして、茲に始めて罪惡觀が生ずるのである。而して其罪惡のものを、唯御慈悲ばかりで御助けにあづかるのである。此處に於て感謝報恩の念が自然に起りて、世諦經營の實行となるのである。抑々一向專修と云ふことは、他の菩提心を起し戒を守ることの出来るものに、是を爲すなと云ふことではない。若し一向專修といふことを徒らに出來得べき善を爲さず、止め得らるべき惡を止めぬと云ふことに思ふならば、大なる誤である。是ならば罪惡觀の起らざるのみならず、信仰と云ふことは他の總てのこと、矛盾することになる。今日の青年が動もすれば宗教を國家と相容れざること、思ひ、信仰は倫理と背馳するが如く考へるのは、大なる過である。全體一向專修と云ふことは、出來得べき菩提心や孝養父母を行はぬと云ふのではない、我々が菩提心が起せる、戒が守れる、孝養父母が出來ると思ふてゐるのが間違である。若し我々が菩提心を起し三學六度の行を修して佛になり得らるゝならば、則ち諸佛菩薩の本願で助かるのである。何を苦んで阿彌陀如來世無上の本願を起し給ふべき。抑々選擇本願の起りは、佛より戒を修せな、

菩提心を起すなど仰せられたのでは無い、我々が戒を修し菩提心を起すこと能はざることをかねてしらしめして、是を助けんがための選擇本願である。夫故諸佛菩薩を信じてならぬのでは無い、私が力なき故諸佛菩薩の教では助からぬのである。又決して諸佛菩薩が御慈悲が少なくして助け給はぬのではない、過失は總て我々の身の上にあるのである。『歎異鈔』に、其故は自餘の行をばげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはむこそすかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もまよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。と仰せられたが是である。そして此いづれの行もまよびがたき事かねてしらしめして、たすけんがためにだゞ念佛の一つを選擇したまひたのである。又『歎異鈔』に、煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死を離るゝとあるべからざるをあらはれたまひて、願を起し給ふ本意、ひとへに惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人、もとも往生の正因なり。と仰せられたが即ち如來選擇の願心である。如此く深き選擇願心を戴きてみれば、出來得べき菩提心や孝養父母を捨てるのでは無い、自分の出來ざることを自覺して、其出來得ざるものを捨て給は

ぬ御慈悲一つに安心するが一向專修の本意である。『歎異鈔』に、親鸞は父母孝養のためにとて、念佛一遍だにもまうしたることさふらはず、乃至我力にてはげむ善にてもさふらはずこそ、念佛を廻向して父母をも助けさふらはめ、たゞ自力をすてゝ急ぎ淨土のさとりをひらきなば、六道四生のあいた、いづれの業苦しづめりとも神通方便をもてまづ有縁を度すべきなりと。出來る父母孝養をしないのではない、出來る自力廻向を止められたのではない。孝養父母が出來ぬのである、自力廻向が出來ぬのである。其出來得ざるところを哀れみ給ふが選擇願心である。而して其者に與へ給ふが如來二種の廻向である。是が實に法然上人の一向專修を相承まします親鸞聖人の眞宗の眞髓である。

『歎異鈔』に、當時の一向專修のひとりのなかにも、親鸞の御信心にひとつならぬ御事もさふらふらんとおぼえさふらふとある。法然上人の一向專修の教をきながら、其眞意を傳へたる人は甚だ少なかつた。現に三百八十餘人の御弟子の中に、眞に是を戴かれた人は僅に五六輩にだも足りなかつたと云ふことである。それは何故なれば、例ひ一向專修の教を受けながら、他の諸の行が行なへるものでないと云ふ自覺が無か

りし爲に、結局諸行往生を免すことになつて仕舞つたのである。しかるに親鸞聖人は、いづれの行もまよびがたき身なることを自覺されたのである。其自覺されたる源は、佛かねてしらしめして何れの行もまよびがたきものを、助けんと、選擇願心より成就したまひし一向專修の南無阿彌陀佛一つである。世上より眞宗のことを、一向宗と呼ぶも最である。又專修寺の名あるも無理ならぬことである。而して現時眞宗に於ては、專修專念一向一心と云ふことが大切なることとなりて、諸佛菩薩を念せず、餘行餘善を行ぜず、彌陀一佛、念佛一行のほかは雜行雜修として是を嫌ひ、例ひ念佛一行にしても心に既に雜りあれば、眞の他力ではないと戒むるに到りたも、自然の結果と云はねばならぬ。然るに法然上人の一向專修の教化を蒙りながら、實際に於ては一向專修とならなんだ如く、これほどの親鸞聖人の教を蒙りながら、なほ眞に一向專修になることは六つかしきものである。眞宗のものが雜行をしてはならぬ、自力を捨てねばならぬ、現世を祈りてはならぬと云ふ點にのみ心を傾けて、諸善萬行自力作善が出來ないのぢやと云ふことを自覺するものが少ない。夫故に信心は頂いたが、御恩報謝が出來ぬとか、眞諦門は解つたが、俗諦門が

行なへぬとかいふ様な歎きをなすものがある。是は眞諦門が分りたのではない、信心が頂けたのぢやない。眞宗の眞實信心と云ふは此何れの行も行なへず、致方なき地獄一定のものを御見捨てなきが御慈悲である、如來の親心である。是を頂いて罪惡の自覺が出來たのが眞實の信心である、眞諦門である。故に一向專修の眞の味は、實に我等が現に是罪惡生死の凡夫常没常流轉無有出離之縁と、罪惡觀の起る點にあるのである。且また世間と佛法、國家と宗教、倫理と信仰等、相背馳矛盾する様に考へる誤りも、畢竟一向專修の眞の意味を味はぬからである。若し一向專修と云ふことを、世間を捨て、佛法に入れと云ふことならば、出家發心捨家棄欲の佛法となる。然るに佛かねてしらしめして煩惱具足の凡夫、士農工商の生活の避くべからざることを憐れみ給ひて、建てたまひたるが彌陀の本願である。故に妄念妄執の心のおこるをも止めよといふにもあらず、たゞ商ひをもし、奉公をもし、獵すなどりをもせよ、かゝるあさましき罪業にのみ朝夕まといぬる、われらごときのいたづらものを助けんとちかひましますが彌陀の本願である。故に此本願を信じたてまつれば、我等の罪業深重の淺ましきものが、御慈悲一つで如何なる世諦經營を爲

すと雖、助けたまふのである。然し商、奉公、獵すなどりばかりが罪悪ではない、政治家にせよ、教育家にせよ、宗教家にせよ、皆生活を追ひ日夜罪業の身たることを忘れてはならぬ。又出来る孝養父母をしないのではない、我々は孝養父母が出来ないのである。五逆十惡の惡人である、不忠不孝のいたづらものである。例ひ國家と雖列國對峙の間に立つ以上は生存競争優勝劣敗をまぬかれぬ。此間に於て唯如斯き十方衆生を悲愍し給ふ大慈大悲の阿彌陀佛ましますばこそ、是を信じ是を稱へて我等の不孝を懺悔し、罪業を自覺して、國にも盡し、親にも事へることが出来るのである。故に一向専修より来る罪惡觀が、報謝經營の淵源となるのである。

然るに茲に注意すべきことがある。如此く罪惡の點を氣附いたはよけれども、此罪惡に對して見捨てたまはぬ、大悲の親心を十分に戴かねば眞心徹せぬ恐がある。即ち眞の罪惡の自覺にならぬ。世間の多くの眞宗信者は信心の受け心に力を入れるもの故に、佛より我等に興へ給ふ御慈悲を頂かずして、恰も佛より御慈悲を奪ひ來りたるものゝ如く、斯るものを御助けと氣休めをしたり、又是であるから佛様におまかせせねばならぬと佛様に押しつけてばかり居る者が多い。是は言葉

の上では頂けた様なれども、眞の御慈悲を頂いたのではない。

如來の方より我等の煩惱、境遇、悲哀、罪惡、逆境、業報、總てしろしめすのである。しかも親が子供の性質に従つて一適賢に愛するが如く、如來は衆生を二子の如く憐念したまふのである。茲に一言注意をせねばならぬ。世の苦しめる人、惱める人、泣ける人、且又人生に享樂する人、如來は總ての人の心の底迄ししろめして、飽まで満足するまで矜哀したまふ御慈悲である。此御慈悲を頂く一念に、我々は如此く大慈大悲の光明の中に攝取されて、此上もなき満足を與へられるのである。人生如何なる境遇にあるも悲しむことなく、如何なる罪惡も救濟されるのである。『御一代記開書』に、愛欲も名利も皆煩惱なり、されば機のあるかひをするは難修なりと仰せられた。何故機のあつかひがなくなるかと云ふと、佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、煩惱具足と信知して本願の親心に満足さして貰ふのである。例ひ、惡いと氣がついても、其惡しきものを呆れもせず憐れみ給ふ深き御慈悲に滿されねばならぬ。此親心に満足した有様が信心歡喜である、踊躍歡喜である、大慶喜心である。自然にあふれ出づるが佛恩報謝の念である。此報謝の念より總ての世

誦經營が出て來るのである。如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし。『化身土』の卷に、眞に知ぬ、専修にして雜心なる者は大慶喜心を得ず。かるがゆへに宗師はかの佛恩を念報することなし、業行をなすといへども心に憍慢を生ず、つねに名利と相應するがゆへに、人我みづからおほふて同行善知識に親近せざるがゆへに、このんで雜縁にちかづきて往生の正行を自障々他するがゆへにといへり。悲しきかな垢郭の凡愚、無際よりこのがた助正間雜し、定散心雜するがゆへに、出離その期なし。みづから流轉輪廻をはかるに、微塵劫を超過すとも佛願力に歸しがたく、大信海にいりがたし。まことに傷嗟すべし、ふかく悲嘆すべし。と戒められたは實に眞の一向専修でなき故に、報恩謝徳の念なき等の失あることを示されたのである。深く味はねばならぬ。



そも一向専修の確を難することは、公胤のみにあらず。餘人また難じていばく、たとひ諸行往生をゆるすとも、往生のさほりとなるべからず、なんぞあながちに一向専念といふや、おほきなる偏執なりと云云。聖人之なきしてのたまはく、かくの如く難する者は、淨土の宗義を知らざる者なり。その故は、釋尊は一向専念無量壽佛とき、善導和尚は一向専稱彌陀佛名と釋し給へり。釋尊かくの如し。源空もし釋釋を離れて、私に義をたてば、まことにせむる處の如し。若し人、一向専念の確を難ぞんと思はば、釋尊善導を難すべし。そのとが余く我身に非ずと云云。また人の難じて曰く、諸教所説多在彌陀なるが故に、諸宗の人師かたはらに彌陀をほめ、普く淨土をすむ。この故に前代往生の人多し、この宗をたてずといふとも、念佛往生を勧めんに、何の不足かあらん、偏にこれ勝他なりと云云。聖人きしてのたまはく、淨土宗をたつ心は、凡夫の報土に生ずることと殊に現はさんがためなり。その故は、天台の教祖によらば、凡夫の往生を許すと雖、身土を判ずること至りて淺し。法相によらば、身土を判ずること深しと雖、凡夫の往生を許さず。諸宗の所説まことにたくみなりと雖、總じて凡夫の報土に生ずることを許さず。もし善導和尚の釋義によりて淨土宗を立る時、僅に一世の念佛力によりて、界内鹿淺の凡夫、忽ちに報土に生ずる義に、あきらけし。この故に別して淨土宗を立つと云云。

講義

『教行信證』信卷三信釋

(夏季求道會講話)

近角常觀

第七席

信樂釋(釋文)

前席に於ても信樂釋をお話したのであります。此の信樂釋の處は先達來もお話する如く、至心信樂欲生とある三信中、一番肝腎の處でありまして、既に申した事なれども、御存知の如く初めに至心信樂欲生の三心とあるを、天親菩薩が一心と申し下されたは何うか、と筆をお起し下されて、至心はまことの心であり、欲生は淨土に參らんと願ひ樂む心である。して其の至心のまことは信樂の信の字に入り、欲生の淨土往生を願ひ樂む心は、樂の字に入るとお知らせ下され、つまり三信共に皆な此の信樂に入る肝腎の信樂であります。申す迄も無く信樂とは信心歡喜の有様にて、夫れ故毎々申す文なれども、親鸞聖人は『信卷』の初めに此の信樂を擧げさせられ、

夫れば信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起とあります。如來選擇の願心とは、即ち上來度々繰反す法然聖人『選擇樂』に示し下される選擇本願念佛の趣きにて、我々惡しき心の止まぬ者を、佛が引受け助くるとの廣大の思召しより、大悲の親が此の罪深き淺間しき私を、飽く迄見捨て下さらぬ御親心が選擇の願心であります。法然聖人が示し下される選擇本願念佛の趣きとは、「佛が此の哀れなる者が何うして見捨てられぬ、何うかして其者を助け度い、飽く迄自分と同じ佛に仕てやらねばならぬ」との廣大の御親心にして、之より御成就下されたる南無阿彌陀佛の本願の念佛である。即ち親の手織りの着物と親心とは別物で無い。此の廣大の親心を承はりて、佛の大悲は斯く迄の遣る瀬無き御親切なりしかと、心に眞に頂けたのが、信樂の頂けたのである。て兩三日來當講話も次第に進み、明かに慈悲に氣づいて下される方が、諸方面に一時に現はるゝのであります。之が全く今の「信樂を獲得するは如來選擇の願心より發起す」で、皆様が此の廣大なる親心の程を聞いて見れば、ちつとして居るに居られず、聞く一念に踊躍歡喜の思ひをなし下される事でありませぬ。此の皆様が親心を聞く一念に、身を歡ばし心を喜ばしめて、喜ばるゝのか即ち信樂の有様にて、段々文字の味ひを頂くに、此の信樂の文字程味の深きは無いのであります。即ち信は信心、樂は愛樂にて、之れを經文の御言葉で言へば信心歡喜となるのである。之が私共の心中に開發して下される、と申し下されるのであります。

處が前にも一度申した事であり、皆様も定めて御氣づき下された事とは思ひますが、此の三信を初めの字訓釋の處では、佛の慈悲を私の心に頂いた自分の方の心持ちで書き下されてある。字訓釋では一字々々の字の訓が、皆な此方の頂いた處で、お書きなされてあります。處が次ぎに阿彌陀佛が其の三信を、至心信樂欲生の三信と事分けて御説き下されたは何うかとなりて、即ち第三席以來お話する叮嚀に三信を申し下される處では、皆な佛の信心の方よりお書きなされてあるのである。即ち前に字訓釋にて三信一心の理はりをお示し下される處では、至心も信樂も欲生も別々に我々の心で起すのでは無い、佛の慈悲を有難いと頂く一心に、皆な具はるのであると、私の頂き心地の上よりお説き下され、さて其の信の一念に三信の具はるは何か。抑も佛の御手許に於て三信を成就して、夫れが此方に届いて下された處で喜びの心が起るなれば、即ち一心に三信が具はるのである。即ち三信は、頂くは此方の心に頂くなれども、もとく佛の信心であつて、凡夫の此方で起す心で無い。即ち至心は佛の御まことであつて、我々の方は如何にするもまことになれ無い奴なのである。又信樂もあゝ難有いと頂くが信心歡喜の信樂なれども、其の信樂が我々の方より得んとして、得られる信樂で無い。況んや欲生の往生を願ふ心などは、逆も起らぬ我々なのであります。即ち斯く私の方は佛に向ひまことに出來ず、慈悲を喜ぶ信樂の心も起らず、往生を樂む欲生心も無き、

三信など逆も起らぬ私なれども、佛の方より飽く迄其の私にまことになし下され、遣る瀬無き大悲をかけ、我が淨土に生れんと欲へよとの廣大の仰せを承はつて見れば、如何にまこと無き私も、其まこと無き私を飽く迄見捨て下さらぬまことに遇ひ、あゝ有難いとの思ひが起る。又此方は疑ひ隔て居る私なれども、其の者を向ふより隔てず疑はず、飽く迄遣る瀬無き大悲を以て向うて下される佛の信樂と聞く時は、其の信樂が此方の心に頂けるとなるのである。此の前の字訓釋とお示し方が變つて居る處に氣をつけねばならぬのであります。て兩三日來皆様の氣づかるゝ處も茲ひと所である。今迄はまことになり度い、信心を頂き度いと力んで居たのであるが、こんな心で自分でまことになれたり、信心が頂けたり出來るものか。こんな者を夫れ程迄に知り抜き、お見捨てさらぬ慈悲と、我が身につけ、又世を見るにつけ、此の親心を聞かせて貰ふ一念に、自分で然う思つて頂くのでは無い、其の聞いた一念に「あゝ然うてムりますか」と、口に言葉の出る時は、もう既に遅れて居る、其のきく一念に「念佛申さんと思ひ立つ心の起る時」と、お喜び下するのであります。て信樂も、佛の方よりして、私を信じ私を疑はず、遣る瀬無き大悲を以て、私が疑ひ隔て手向ひ仕ても、あとがたゝぬ迄に、向ふより遣る瀬無き思召し下される佛の信樂である。茲の處は能く私の言ふこととありますが、何うかして親が此の着物を着せて遣り度いと下される親の手織りの着物を、唯着物丈けと見るのでは、親の心は頂かれぬのである。其の下される親の着物は、當り前の着物の着られぬ者に、此の一枚の手織りを着せてや

り度い、との親のまことの塊りなのである。譬へば茲に水が一杯ありて、之れが南無阿彌陀佛の水である。其の水を見ると、如何にも綺麗な透き通つた水である、といふ其の綺麗なといふ處が、即ち至心のまことである。其のまことの綺麗な水は、即ちなみ／＼と、其上々々溢れて下さるお慈悲の信樂の泉である。其のお慈悲の盡きざるまことの泉を、我々の濁つた心の中へ、飽く迄佛の方より廻向して下さるの故、即ち之が次の欲生となるのである。即ち南無阿彌陀佛の一名號は、綺麗な透き通つたる佛のまことの水である。其のまことの水は、此の罪深き者を飽く迄見捨てぬとのお慈悲の信樂の水である。其水を佛の御手許より私の方へ、常に生れんと欲へ／＼と與へて下さる。此の至心信樂欲生の廣大なる佛の仰せが届いて下さる一念に、我々の心に於て、あゝ有難きお慈悲と頂ける。其の、一念にあゝ有難い頂くまことは、即ち是れ佛のまことが届いて下されたのなれば、此の心私の心に非ず、即ち佛のまことである。又其のまことが私の胸に届いて下された處が信樂の信心歡喜であり、其の廣大のまことが届いて下さるの故、此度びは私の心に自から淨土往生を願ふ心が起る、之が欲生心である、となるのであります。

三

そこで本文になりては、先づ初めに(本文、前號ニアリ)『信樂と言ふは、則ち是れ如來の満足大悲圓融無碍の信心海なり』
 信樂と言ふは、如來の満足大悲——満足大悲といふは一點の

缺け目もなく、其の上／＼と充ち満ちて下さる此の上無き

お慈悲故、満足大悲である。又圓融は「まるく融ける」無碍は「一切の事が更に碍りにならぬ」といふ事である。即ち信樂は此の廣大なる如來の信心海であると、茲に海とは、佛の御手許に於て、斯く私が哀れて下さると此の者を見捨てず斯く廣大なる大悲の御心を以て眺めて下さる、其の廣大なるお心を海と表はし下されたのである。して此のお心が届い下さる處が、我々の信心となるのであります。
 『是の故に疑蓋間雜有ること無し。故に信樂と名く』。
 故に佛のお手許に於て、私共に對し疑ひの心といふものは微塵も雜じらざる廣大のお慈悲故に、私共の方に於て如何に疑ひを起し、どのやうな障りが有らうが、皆な此のお慈悲に融かされて仕舞ひ、更に邪魔にならぬのである。此の廣大の御心故に、之を信樂と名けるとお知ら下さるのである。

『即ち利他廻向の至心を以て、信樂の體と爲る也』。
 即ち利他廻向の至心が、此の信樂の體であると。こは親鸞聖人の『西方指南鈔』の中にも、本願の體用といふ事ありて、用といふは、其の體の働きてある。之に見ても聖人は常に、體と用といふお話が有つたと見えるのであります。即ち御存知の如く、『教卷』にも
 夫れ眞實の教を顯さば、則ち大無量壽經是れなり。(中略)
 是を以て如來の本願を説くを以て經の宗教とし、即ち佛の名號を以て經の體とする也。
 との御文もあつて、『大無量壽經』の「かなめ」は、佛の本願一つをお説き下さる處である。故に南無阿彌陀佛の佛號が

四

經の體である、との言葉でありませす。即ち今茲でも至心を以て信樂の體とするとは、即ち手織りの喩えて言へば、親の手織りの着物が體である。して其の手織りの意味は、普通の着物では忽ち破りて仕舞ひ、よごして仕舞ふ汗かきの亂暴者に、此の我が手織りを着せ度い、との親のまことの塊りである。即ち唯まこと丈けては我々の手に握れぬけれども、既に此の通り手織りを成就して、之を汝に遣ると言つて居るのが、親のまことの事實で無いが、南無阿彌陀佛は佛が助けて下さるお慈悲ぢや／＼といふ證據は、現に斯く六字名號の着物の成就してあるに見よ。之が親のまことの表はれて無いが。蓮如上人の御歌には、

かたみには六字のみ名をのこしおく
 なからんのちはたれも用ぬよ。
 と。夫れ故南無阿彌陀佛は親のまこと、至心の體にて、此の六字名號の親の手織りは、此の私に着せ度い／＼との五劫永劫の長の間の親のまことの塊りとなるのであります。而して其のまことは何かといふに、唯美しく透き通つてをることや、虚言言はぬ事がまことでは無い。まことは悪い者を何うしても見捨てられぬといふお慈悲がまことである。まことは彼の男は虚言いはぬから、至誠ぢやと言ふのでは無い。如何なきたなき、泥土の如き私の心でも、夫れを見捨てず、飽く迄其の者にお慈悲を注ぎ／＼、其のお見捨て無きお慈悲の爲めに、遂に私の頭が下る迄、お慈悲を注いで下さる。其のお慈悲が眞のまことである。故に此の度びは信樂のお慈悲の體は即ち至心のまこととなるのであります。

そこで覺如上人の『執持鈔』の中には
 されば本願や名號、名號や本願、本願や行者、行者や本願といふ、このいはれなり。
 といふ御言葉があります。之れは何か。本願は佛の遣る瀬無き御親心であつて、其の親心は今言ふ如く、南無阿彌陀佛の親の手織りの着物である。即ち本願や名號、名號や本願である。親の手織りと親心とは、離していふことは出来ぬのである。手織りの着物無しに、唯親心丈けあつても、夫れでは此方に頂く可きものが無いから、何もならぬのであります。

親が私に此の一枚の手織りを着せやうとの其の親心の頂けた時は、即ち最早や其の親の手織りが離せぬといふ處が、親心の頂けたしるしなのである。親心は頂けたけれども、まだ親の手織りは着られぬといふのは、まだ眞に親心の頂けたのでは無いのである。自分如き他の着物の着られぬ者に、着せるとお作り下されし御親心の有難やと頂けた時は、今迄着て居た他の着物は脱ぎ捨て、其親の南無阿彌陀佛の手織着て、南無阿彌陀佛々々と、専ら念佛出來る處が、眞に親心の頂けた處なのである。「我々は今迄現世を祈つたり、諸神諸佛に心を寄せたり、もつと此の世を善くなり度いとのお思ひが有つたが、然うては無つた。此の仕て見やう無き、如何に仕ても善くならぬ亂暴者をお見捨ても無く、其の者に着せると手織りを下さる遣る瀬無き親心」と、之を聞くなりハツと頂く一念には、現世祈りや、今迄の善くなり度いの思ひが、心で捨

てんと力んで捨たるのでは無い。此の親心を頂く上は、「あ、今迄は長々馬鹿らしかつた」と、いつの間にか自然に捨てられて仕舞ひて「今迄信仰を得度い、もつと人格を高め度い、極樂に生れ度いなど、皆な之れ私の計ひであつた。斯る計ひを起し、身の程忘れて苦んで居る私の有様を知り抜かせられ、其者に着せると下さる南無阿彌陀佛の遣る瀬無き親心なりしか」と、其の一念に今迄の着物を脱ぎ捨て、南無阿彌陀佛々々と念佛稱へらるゝ處が、お慈悲の頂けた處である。即ち『救異鈔』の示して頂けは

親鸞におきては唯念佛して彌陀に助けられ参らすべしと、よき人の仰せをかふむりて信するほかに別の仔細なきなり。

即ち唯念佛して彌陀に助けられ参らすべしとの仰せが信ぜられたのなら、其信ぜられた通り南無阿彌陀佛々々と念佛が出なければいかぬのである。其念佛の出る親の手織りの着られた處が、即ち親心の頂けたしるしてある。故に本願や名號、名號や本願である。着せ度い〱の親心は有つても、肝腎の着る着物が無ければ、親心は半分になつて仕舞ふのであります。處が又其の着物は有つても肝腎の子供が夫れを着なければ、又親心は半分になつて仕舞ふのである。即ち次の本願や行者、行者や本願とあるは、佛の方に於て斯く廣大の親心より、着物を作り名號を御成就下されてあつても、肝腎の着る行者が無ければ、其の御苦勞が水泡になつて仕舞ふのである。夫れ故我々衆生が、此の廣大の親心が届き、南無阿彌陀佛の着物を有難いと頂くに於ては、頂きた自分が満足なるのみならず、遣らうとして下された佛の方が第一満足して下される。

全體阿彌陀佛は單獨に阿彌陀佛としてお出で下さるにあらざ、衆生あつての阿彌陀佛にたましますのである。爾るに衆生が其の根本の親心を頂かぬに於ては、佛の出現は無になつて仕舞ふ。夫れ故即ち「本願や行者、行者や本願」である。親の夫れ程の思召しが衆生の心に届き、衆生が親の下さる手織りを有難いと着る處に於て、親は初めて所詮が有つたと満足して下さるのであります。

五

處が覺如上人の今の『執持鈔』の言葉に「といふ、このいはれなり」と示し下されてある、之は何か。之が先きいふ『西方指南鈔』にあるからにて、これは高田の専修寺に在る御聖教である。私は前年特に、法主臺下の御許しを頂き拜見した事でありすが、其中に先きいふ體用といふ事が叮嚀に書かれてある。今之を言ふと六かしくなる故、一言に分り易く言ひますと、抑々佛の本願の體は何であるか。法藏菩薩が衆生を助けねばならぬとの遣る瀬無き願心が本願の體にて、其の用は、此の凡夫が其の遣る瀬無き親心にて佛になる處が用である。即ち此の私を助け度いとの遣る瀬無き心が本願の體にて、夫れ我々が助かる處が其用の働きてあると、之が一番大きい體用にて、之より段々細かく體用の事をお示し下されてあるのである。先づ第一には、此の法藏菩薩の、我々を助け度いとの思召しを體とするならば、其の本願の結果として、其親心より現はれ下されし南無阿彌陀佛の名號が用であ

る。之は子供に着せ度いとの遣る瀬無き親心より現はれ下されし名號の着物なれば、即ち親心を體とする時は、名號が用となる。又次ぎは其の南無阿彌陀佛の名號を體とすると、此の南無阿彌陀佛は之を届け度いと御成就下された南無阿彌陀佛なれば、衆生が之を南無阿彌陀佛と頂き稱ふる處が用となる。又其の南無阿彌陀佛を頂けば、夫れによつて往生する處が其の用の働きて、往生すれば今度は極樂に参つて樂む處が又用である。と斯く段々に、親が子供に着せ度いの親心より南無阿彌陀佛の手織りが現はれ、夫れを着れば極樂に生れるとある、其の有様を、此の『西方指南鈔』に「本願や名號、名號や本願、本願や行者、行者や本願」と書きなされてあるのであります。さて斯く事分けて言ふと六かしくも、皆さんがお頂きになる處を考へて御覧になると、皆之である。自分如き罪深き者を助けようとの廣大の思召しより、遂に其の本願を成就して南無阿彌陀佛の六字を作り、現に待ち受け給ふ遣る瀬無き御親心と、之を聞く一念に「あゝ有難い」と頂き、口に南無阿彌陀佛々々と念佛して、生命了れば極樂に往生すると、要するに唯是れ丈けの事である。之を一口に言ふと、即ち教行信證となる。即ち『教行信證』といふも、之れ丈けの理はりを示し下されたに外ならぬのであります。て親鸞聖人は『行卷』に於かせられても、

良に知ぬ、徳號の慈父無くんば、能生の困闕けなん。光明の悲母無くんば、所生の縁垂きなん。能所因縁和合す可しと雖、信心の業識に非ずば、光明土に到ること無し。眞實の業識、斯れ乃ち内因と爲す。光明名の父母、斯れ則ち

外縁と爲す。内外因縁和合して、報土の眞身を得證す。云々。

同じく光明名號の因縁により、「あゝ有難い」と頂いた處が眞實の信心にて、其の信心の上からは、此度びは南無阿彌陀佛の名號と、遣る瀬無き光明に護られて、極樂報土に生れさせて頂くとお示し下されたのである。て斯く遣る瀬無き親心を我々が頂く段になると、何處から頂いても皆な一つである。皆な同じなのであります。て上來申述る如く、南無阿彌陀佛の六字が體にて、其の六字の體は、飽く迄私を御見捨て無き至心のまことである。其のまことは遣る瀬無きお慈悲の信樂にて、其のお慈悲を如來より私へ廻向して下さる處が欲生と、之が三倍である。此の味ひが頂かせて貰うて見ると、信仰の上より皆な分るのである。之れ皆な私へ廣大のお慈悲を下され、私が夫れを頂く有様をお示し下されたのであります。て即ち本文にありては、『利他廻向の至心を以て信樂の體とする也』である。即ち佛より此の罪深き私を、飽く迄信じ疑はず、益々廣大のお慈悲を以て向うて下さる、此の信樂の體はと言へば、飽く迄お見捨て無き至心のまことが體である。佛のまことといふ其のまことは他に在るに非ず、此の遣る瀬無きお慈悲の信樂がまこととなるのであります。

六

さて次ぎは、この恐らくは親鸞聖人がお示し下さる三信釋中のどれにもお示し下さる御言葉であつて、殊に茲は最肝腎の信樂釋の言葉故、恐らく聖人の膺と頂く事でありすが

が、
 「然るに無始より已來、一切の群生海無明海に流轉し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて清淨の信樂無く、法爾として眞實の信樂無し。」

至心釋に在ると同様の御言葉であります。即ち此の信樂は我々初めから信じ喜ばうと思つて、喜ばれる信樂で無い。我々一切の群生海は無始以來無明海に流轉し、諸有輪に沈迷と、浮きつ沈みつ迷ひ、衆苦輪に縛り繋れて、即ち私の常に五分々々の根性である。此の五分々々に無始以來久しくはまつて居る人間が、清らかな信樂の心が起り、人を信じ佛を喜ぶ心などが有るものか。本來法爾として眞實の信樂などが有るものか。そんなものは藥に仕度くも無い、と示し下さるのであります。されば次ぎには

「是を以て無上の功德値偶し難く、最勝の淨信獲得すること難し。」

斯る我々故に、我々の身を一寸斬りに切り開くも、善き處とは一分一厘もなく、我々の心を地獄の底迄掘り盡すも、少しも信心喜ぶ心などが起るといふ事は無い。是の故に我々として佛の無上の功德に遇ふ事難く、眞實の信心を頂く事が絶対に出来ぬのである。

「一切の凡小一切の時の中、貪愛の心常に能く善心を汗し、瞋憎の心常に能く法財を燒く。急作急修して頭燃を灸ふが如くするも、衆て雜毒雜修の善と名く。亦虛假誑偽の行と名く。眞實の業と名けざる也。此の虛假雜毒の善を以て、無量光明土に生ぜんと欲するは、此れ必ず不可也。」

法者ぢや理想家だと言つて見た處で、此の毒雜りの善では仕やうが無い。何れ丈け善美を盡した食事であつても、砂が雜つて居つては喰べられぬのである。我々何れ丈け念佛稱へるにしても、此の雜毒雜修の砂まじりの善では、喰べられたものでは無いのであります。又「虛假誑偽の行と名く、眞實の業と名けざるなり。」又我々の爲る善は、何程一生懸命をやつても、貪瞋邪偽誑詐百端にして、皆な是れ「うそ」「偽り」「へつらひ」「ぬりまぶし」の行である。到底眞實の業と名くる事は出来ぬのである。之は先きにも申した如く至心が信樂の體故、至心の眞實を言はずしては、信樂を言ふ事が出来ぬのである。佛のお見捨て無き廣大なる慈悲の信樂を言ふには、至心のことと離れて言ふことが出来ぬのであります。て斯く我々のする善では、到底眞實といふ事は言へぬ。故に次ぎには「此の虛假雜毒の善を以て、無量光明土に生ぜんと欲するは、此れ必ず不可也」である。此の虛假雜毒の善を以てしてはいつ迄やりても、之では無量光明土に生るゝ事出来ぬのであります。

七

さて斯く我々自分で爲る善では駄目であるが、されば何うすればよいのであるか。そこで次には、

「何を以ての故に、正しく如來菩薩の行を行じたまへる時、三業の所修乃至一念一刹那も疑蓋雜ること無きに由つて也」

である。私より求むるので無ければ、何うするかといふに、

我々一切の凡小は、一切二六時中、常に貪欲愛欲の心を起し、善心更に無い者である。偶々少し許りの善き心を起しても、其の貪欲愛欲の心が雜るもの故、雪の如き善心も忽ち其の泥の心で穢されて仕舞ひ、又「瞋憎の心常に能く法財を燒く」我々人と交際上に於ても、人に善き事を仕た如く思ひ、人を世話したなど、一かど親切が出来た氣持になり、又佛法上に於ても善根が出来たなど思つて居つても、一寸瞋恚の煩惱が起り、一念の腹立ちすれば、今迄の親切も善根も一邊に皆な燒けて仕舞ひ、十年の交りも一朝の腹立ちで、忽ち仇敵視するに至るのである。斯く我々のする善は如何に骨折つても、一念貪欲の波が逆立てば、忽ち穢され濕められて仕舞ひ、一念瞋憎の炎が燃ゆれば、忽ち燒かれ碎かれて仕舞ふのである。どんな綺麗な物であつても、燒けたり濕つて仕舞うては何にもならぬ。親鸞聖人は亦「正信偽」の中に

貪愛瞋憎の雲霧、常に眞實信心の天に覆へり。
 といふ御言葉もあります。又「急作急修して頭燃を灸ふが如くするも、衆て雜毒雜修の善と名く、亦虛假誑偽の行と名く。眞實の業と名けざる也。我々が「さあ之から善くせなければならぬ、」際立て、立派になさなければならぬ」又信仰上にして「之から一生懸命に求めなければならぬ」「力の限り念佛勵まなければならぬ」「あゝである、斯うである」と、急作急修して、頭に火のついてあるを拂ひ退ける如く、一點の猶豫無く一心不乱をやつたとしても、本當の者で無い、衆て皆な之れ雜毒雜修の善と名ける。即ち皆な之れ毒雜りの善にて、色々汚きものゝ雜つて居る善である。如何に全力を盡くして、佛

佛の方より斯く私に善くして下さるによりて、此方が難有いとなるのであります。其の善く仕て下さるは何う善く仕て下さるかと言ふに、即ち「正しく如來菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修乃至一念一刹那も疑蓋雜ること無きに由つて也」と、此方は一分一厘人に譲れぬ根性の私であるに、佛は卵の毛の先き程も此者を憎むとか、不足だと思召し下さらず、一念の疑ひも雜ること無しに、私が疑へば疑ふ程彌々私を信じ、益々哀れみて下さる廣大の御心なのである。世間の上で言ひても、「彼の人を疑つて居たに、計らんや彼の人にそんな事無つた」となる時は如何にも此方が申譯無つたとなる。私は能く、彼の人はこんなこと思つて居たらうと思つてると、計らんや其人は却つて自分に非常の好意を持つて、呉れた事が分り、申譯無いことが折り／＼ある。又能く日常生活に在る事で、私の常に言ふ事がありますが、我々物を失うた時、「置いた物が無くなる筈が無い、之は誰か盗つたんで無いか知らん、外の者が取る筈が無いから、或は下女でも……」など、忽ち心で想像を逞しくするのである。「併し取つた處を見も仕無いでこんな事を思ふのは可かぬ」と、初めは我と我が心を押へて見る。併し何うも心が落ちつかぬ。「いや取つたにしても、遣つたと思へばよい」と思つて見る。「併しよいはよいが、遣るなら遣るに、盗つたのはをかしい」と、夫れから夫れへと段々に積んで、いゝんな思ひをしたあとで、ひよつと袖から其物が出て來た時は、何うするか。之は皆んがやつて措く事に違はぬのであります。斯く充分疑ひ、疑ひ抜いた揚句に其の物が袖からひよつと出て來た時には、「あゝ、在

つたわい」と自分は済むかなれど、疑はれ人にしては夫れでは済まぬ。「盗つた」と長いこと疑ひ、果ては「結局遣つて置いてよいわい」迄にされて、あとで夫れが自分の袖から出て来た、實に疑はれた人に對しては、申譯無き限りなのであります。然るに相手は此方が充分疑ひに疑ひて、充分調べた最後に何一つ據所が見つからぬとなりて、此方の態度を少しも悪しく思はず、一緒に心配して呉れて、何うも氣の毒だ」とふかく同情の心を寄せて呉れる。此一點自分の潔白を立てやうとせず、ひたすら共に心配して呉れる向うのまことに遇ふ時は、其の向うのまことの爲めに「あゝ申譯ないことを思ふた、氣の毒な事した」と、たとへ下女に對しては「も心の中で頭が下り、あやまる事が出来るのである。全體我々が有難くなり度う喜び度う信じ度うなどいふのが、抑々佛を疑つて居るからにて、佛が有るか無いかなど疑つて居るから、斯る心が起つて來るのである。其の取つたり置いたり私の根性を、佛は更に不足とし給はず、其の私を他く迄信じ切つて下されて、

設ひ我れ佛を得たらんに、十方衆生至心信樂して我國に生れんと欲うて、乃至十念せん、若し生れずば正覺を取らず。と、呼んで下さる廣大のお心と聞くと、「さて、長々申譯無つた」と、彼の板敷山の辨圓の如くである。辨圓が親鸞聖人を仇敵として、聖人を害し奉らうと思ふて、板敷山で待ち伏せ仕たけれど、遂に待ちきれず、庵室に押しかけて聖人にお目に懸つた。聖人の自分を哀んで下さる優しきお姿に接するや否や、「害人忽ちに消滅して、剩へ後悔の涙禁じがたし」

「あゝ長々刃向うて申譯無つた」と、聖人のまことの爲めに、遂に強剛難化に辨圓が、氣づかせて頂くに至つたのである。て此方から信じよう」と仕ても、夫れでは必ず不可である。「何を以ての故に、正しく如來菩薩の行を行じたまへる時、疑蓋難ると無きに由つて也、」此一點疑ひの難ると無き佛の信樂に由つて、難有やと頂かせて貰へるのが信心であります。

八

次ぎには
『斯の心は即ち如來の大悲心なるが故に、必ず報土の正定の因と成る、』
此の一念一刹那も疑ふことなく、飽く迄此の私を往生せしめようとの廣大の信樂を以て向うて下さるお心は、佛の遣る瀬無き大悲心なるが故に、此のお心を頂いた一念は必ず報土正定の因となる。此の遣る瀬無き大悲のお心を頂いた者は、必ず佛のお側に往かせて頂けるのであります。

『如來苦惱の群生海を悲憐したまひて、無碍廣大の淨信を以て、諸有海に回施したまへり。是を利他眞實の信心と名く。』
佛は一切苦惱の群生海を悲憐し給ひて、私の胸の中を一々御覽下さるのである。佛心は十方法界に至らざる隅無く、小は芥子粒の地に至る迄、廣大のお光が至り届いて下されて、如何なる極微の處をも見落さず、必ず其者を救ふとの慈悲故、私の胸中の苦しい處をば七重八重、心の底の底迄廣大のお心で照し哀はれみ下されて、無碍廣大の淨信を以て、有らゆる者の心に、廻施して下さるのである。無碍廣大の淨信とは此の佛

のお心を頂いた一念は實に無碍廣大で、此の佛の慈悲といひ光明と謂ひ、其の大きいなること無碍なる事、人間の量り得る所に非らざるが故に天親菩薩は、此の佛を盡十方無碍光如来と示し下された。其の無碍廣大なる佛の慈悲を佛の方より回施して下され、私の此の有碍の汚ない胸の中に充ち満ちて下された處が信心故、此の廣大のお心を頂いた處をば、利他眞實の信心と名ける。又天親菩薩は初めにある如く、之を一心と示し下された。て一心とは此の廣大のお心が、煩惱成就の私の胸中に届いて下されて、私の胸中の暗みの破れた處を一心と示し下されたのである。『和讃』には宣はく、
論主の一心ととけるをば、曇鸞大師のみことには、
煩惱成就のわれらが、他力の信とのべたまふ。
盡十方の無碍光は、無明の暗みをてらしつゝ、
一念歡喜するひとを、かならず滅度にいたらしむ。
實に斯く無碍廣大のお心より私の無明の心を知り抜かせられ、常に此の私を照しづめにして、遂に此の廣大のお心が、私の胸の中に到り届いて下された一念が、一念歡喜の信心であります。

九

さて次は、茲に於てか第十八願成就の文をお舉げ下されて、其の廣大のお心に届く處をお示し下されて、

本願信心願成就文。經言、諸有衆生聞其名號、信心歡喜、乃至一念、

之は御存知の如く當流は、『御文』の中にも
信心獲得すといふは、第十八の願をこゝろうるなり。
と示し下されて、此第十八願の廣大の親心が私の心に届いて下され、聞其名號信心歡喜と其の遣る瀬無き親心を、私の心に頂く處が、實に骨目である。淨土眞宗はもう唯此の聞名號信心歡喜のこれ一つ、是れ一つを頂く爲めに皆様も態々茲でお聞き下さるのであります。而して茲はもう先日來繰り反しお話すること故、詳しく言ふに及ばぬ。『信卷』には此の御文を御示し下されて、

經に聞と言ふは衆生佛願の生起本末を聞いて、疑心有ること無し、是を聞と曰ふ、信心と言ふは即ち本願力廻向の信心也。歡喜と言ふは、身心悦豫を形はすの貌なり。乃至と言ふは多少を攝するの言なり。一念と言ふは、信心二心無きが故に、一念と曰ふ。是を一心と名く。一心は則ち清淨報土の眞因なり。
と仰せられあります。又
一念とは斯れ信樂開發の時刻の極促を顯はし、廣大難思の慶心を彰はす。
との御言葉もあります。即ち南無阿彌陀佛の廣大なる御本願をお起し下された其の根本の遣る瀬無き大悲の親心を承はり、之に無量永劫の夜を明けさせて貰ふた信心歡喜の一念をお知らせ下さるのであります。

一〇

又次には

又言、他方佛國所有衆生、聞無量壽如來名號、發能一念淨信、歡喜愛樂已上

之は前にも申す『大經』の異譯『如來會』により、上の本願成就の文を指示下されたのであります。即ち「他方佛國の所有の衆生、無量壽如來の名號を聞いて、」が上の聞其名號であり、「能く一念の淨信を發して歡喜愛樂せん」が「信心歡喜」に當るのである。而して此の「能く一念の淨信を發して」の能くの一字が實に有難いのであります。即ち能くとは佛の願力で私の心に手易く淨信を起し能ふ事を顯はして下されたのである。之は詳しく言へば善導大師「二河白道」の御文に

西岸上に人有つて喚つて言はく、汝一心正念にして直に來れ、我れ能く汝を護らん、衆べて水火の難に墮せんことを畏れざれ。

との御言葉が有つて、能くとは廣大なる力で、爲し能ふこと爲し得る事を意味するのである。即ち今茲は佛のお慈悲の力強き、能く私を救ひ遂げて下さる廣大のお慈悲なることを表はし下されしにて、一度言ふても、聞かず二度言ふても言ふことを聞かぬ。遂に駄目だと捨て、仕舞ふのなら、救ひ能はぬのである。處が二度言ふて聞かぬば三度、三度言ふて聞かぬば四度、遂に百邊、千邊言ふて、如何なる強剛難化の者も、遂に助け能ふ迄、飽く迄辛抱を切らさず、救ひ遂げて下さるが救ひ能ふのである。此の「如何なる事が有らうと、飽く迄見捨つる者で無い」との遺る瀬無き仰せが、「我れ能く汝を護らん」であります。て親鸞聖人は此の能の字に註釋を施し下

されて『愚禿鈔』の中に、

能の言は不堪に對する也。疑心の人也。と御示し下された。即ち能くの反對は、能はぬのである。堪えぬのである。堪えぬとは、私如きが自分の力で信仰を得て佛に成らんならんとなると、能くの反對で、堪えぬのである。即ち斯かる考えを起すは佛の廣大なる力を疑うて居るからにて、即ち是れ疑心自力の者である。て今我々は斯く自分如きでは信仰は得られぬなど、佛の力を疑ひて私の方よりは能はぬ、と言つて居るのに、佛の方よりは能ふ、と何處／＼迄も其の者に遺る瀬無きお慈悲を加えて下され、遂に其の佛の能ふの力で、此方の能はぬのが降參して、其の廣大のお心が此方の心に届いて下され、「有難うムいませう」となる。處が「能く一念の淨信を發して歡喜愛樂せん」である。言正信崗の中には又

能く一念喜愛の心を發せば、煩惱を斷せずして涅槃を得。凡聖逆誘齋しく廻入して、衆水の海に入つて一味なるが如し。と仰せられてあります。是れ同じく信心歡喜の一念をお知らせ下されたのにて、皆此の能くの廣大の力より出て來るのであります。

さて次は、斯く「能く一念喜愛の心を發せば、煩惱を斷せずして涅槃を得」故、今度は『涅槃經』の御文をお舉げ下されて。涅槃經言、善男子大慈大悲名爲佛性。何以故、

大慈大悲常隨菩薩、如影隨形。一切衆生畢定當得大慈大悲。是故說言、一切衆生悉有佛性。大慈大悲者名爲佛性。佛性名爲如來。大喜大捨名爲佛性。何以故、菩薩摩訶薩若不離二十五有、則不能得阿耨多羅三藐三菩提。以諸衆生畢當得故、是故說言、一切衆生悉有佛性。大喜大捨者即是佛性。佛性者即是如來。佛性者名大信心。何以故、以信心故、以菩薩摩訶薩則能具足檀波羅密乃至般若波羅密、一切衆生畢定當得大信心故、是故說言、一切衆生悉有佛性。大信心者即是佛性。佛性者即是如來。佛性者名一子地。何以故、以一子地因緣故、菩薩則於一切衆生得平等心。一切衆生畢定當得一子地故、是故說言、一切衆生悉有佛性。一子地即是佛性。佛性者即是如來。已上

何らも此の邊の調子になると、親鸞聖人が一氣にあなたの心に在るだけ、一邊にとつと言つてお仕舞ひ下さるやうにあるのであります。之は御存知の如く、『諸經和讃』の中にも、今此の『涅槃經』の御文に在る處を皆な擧げさせられて、皆な是れ佛の廣大なるお慈悲を指示下されたのであると、お知らせ下されてある。先づ御文に就いて申すならば、初めに、

『善男子大慈大悲を名けて佛性と爲す。……是の故に説て一切衆生悉有佛性と云へるなり。……』

有名なる『涅槃經』の一切衆生悉有佛性の文であります。一切衆生悉有佛性とは、一切の衆生は信仰上、皆な佛性が有るといふことなのである。全體此の一切衆生悉有佛性の文は、佛學上頗る六かしきことなつて居るのでありますけれども、一口に言ふと、一切の者は何んな者でも佛に成れるといふ事である。之は原始佛敎たる、大乘佛敎たるを問はず、又自力たると他力たるとを問はず、本來佛敎とは如何と言へば、佛の説き置かせ給ふ法にて凡ての者が佛に成れる、といふ敎えが佛敎故、總ての者が佛に成れるといふ處が、一切衆生悉有佛性なのである。て抑々釋尊悟りを取り給ふ否や、直に阿羅漢多羅の二人の處に趣き之を度せんと仕給ひたけれども、二人が在らざりしもの故、去つて鹿野苑なる、當初佛に附いて居つた阿若憍陳如等の五比丘の處に趣き、其の者等を信仰にお入れなされた。其の時佛は自ら、此の處に六人の阿羅漢が出来たと仰せ給ひてある。夫れは佛も一人の阿羅漢故、佛を加へて六人とお示し下されたのである。又次ぎには續いて五人の者を化度して下されて、此の處には之れにて十一人の阿羅漢が出来たと、斯く佛を一人として、五人で六人、十人て十一人とお説き下される佛敎故、佛敎の根本に於ては佛も矢張り一人の阿羅漢なのである。阿羅漢とは、つまり悟りた人といふ程の意味にて、斯く佛敎は初めから茲が非常に平等に始まつて居るのであります。即ち佛が悟れる如く、佛弟子も悟られ、男も悟れば女も悟れるといふのが佛敎の本義な

のである。處が夫れが後になり、或者は悟られ、或者は悟られぬとなりて、漸々六かしくなつて來たもの故、此の度び大乘佛敎に於て、一切衆生悉有佛性と説くやうになつて來たのである。處が夫れが又再び六かしくなつて、我々衆生は心根に於て佛性を開見しなくてはならぬとか、或は一切の衆生は佛性が有る、無いなど、六かしく言ふのでありますけれども、何そんなに六かしく言ふには當らぬ。其處になると實に此の他力の味ひて、他方の上では一切衆生悉有佛性とは、どんな者でも佛の廣大なる大慈大悲が頂かれるといふのが、一切衆生悉有佛性なのである。斯くいふと大分飛び離れて聞えけるけれども、斯く頂くが最も易いのであります。即ち十方衆生と呼びかけ下さる大慈の廣大なる仰せ故、一切の衆生が其の廣大なる慈悲を有難うと頂く事が出来るから、一切衆生悉有佛性である。佛性とは、其の廣大の仰せにより頂きたる信心が佛性である、と茲を斯くらくに讀ませて頂くといふのであります。

一一一

さて茲では、御覽の如く、初めに大慈大悲、次ぎには大喜大捨と、慈悲喜捨の四つが示されてある。此の四つが四無量心と言つて、之が菩薩の行ひて、菩薩は此の四事を行ふものとなつてあるのである。之は詳しく言へば、慈とは興樂で、一切衆生に樂みと興ふるのを慈と言ひ、悲とは拔苦で、衆生の悲みを取り去るのが悲である。又喜とは人の樂しむを見て、之を誦ること無く、共に夫れを喜ぶのが喜で、捨とは人に對

るのでは無い。極樂に往くと得らるゝとは、我々は信の一念に往生決定故、我々が此の世に於て信心を頂き念佛稱へた時、得らるゝとなるのである。て今の『歎異鈔』の文には、「念佛もうすのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心に候べきと云云」。即ち我々大慈大悲の現はるゝは極樂に於て現はるゝのであるが、夫れは極樂に於て初めて得らるゝのでは無い、信の一念に於て得らるゝのなれば、其の一念に於て、未來人を助け人が救へる此の廣大の大慈大悲を頂きての念佛なれば、「念佛申すのみぞ末とほりたる大慈悲心に候べき云々」なのである。而して其の此世で頂く大慈大悲とは、畢竟するに満足大慈圓融無碍の信心海なる阿彌陀佛の廣大の大慈大悲を頂くなれば、茲の菩薩は法藏菩薩と取るとよいのであります。斯く荷も菩薩とある處は凡て法藏菩薩と取るが、親鸞聖人の常の御扱ひ方にて、即ち法藏菩薩が我々の爲め廣大の大慈大悲を起し、菩薩の行を行じ下された時、夫れを長々御修行下された故、其の大慈大悲が我々信の一念に於て私の心に頂ける。夫が頂ける故、生命畢りて安養淨刹に往生し、夫れが我々の上に實現して下さるとなるのである。即ち今迄我々の爲め長々と、夫れが我々極樂に往生する處で我々の身に現はれて下さるとなるのであります。故に『涅槃經』今の御文には「大慈大悲は常に菩薩に隨ふこと、影の形に隨ふが如し、一切衆生は畢定して當に大慈大悲を得べきが故に、是の故に説て一切衆生悉有佛性と言へるなり」である。又「大慈大悲は名けて佛性と爲す。佛性は名けて如來と爲す」——之は『諸經和讃』に於て

し、一切怨親の念を捨て、親疎の別無く平等に哀れみを加ふるが捨である。此の慈悲喜捨の四つを佛性と名ける、との御文であります。處て之は讀みよらによつて、何うでも讀まれる。て昔から茲は色々に讀まれてある。先づ「一切衆生は畢定して大慈大悲を得べきが故に」の言葉を、『涅槃經』の當り前の讀み方より讀む時は、一切の衆生は悉有佛性故、一切衆生は此の慈悲喜捨の働さが出来る、讀むのが普通である。處が茲を然う讀むと可かぬ。『歎異鈔』の四章では、

慈悲に聖道淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふはものをあはれみかなしみはぐくむなり。しかれどもおもふがごとくたすけとぐることはめてありがたし。……我々の心の、何處を押えて大慈大悲の働きがあるなど言ふか、そんな心の我々に微塵も無いことは、御同やう少し考ふれば直ぐ分る。又次に

……また淨土の慈悲といふは、念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生にいかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければこの慈悲始終なし。しかれば念佛もうすのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心にてさふらふべきと云云。

故に「一切衆生大慈大悲を得べきが故に」とは、我々極樂に生るゝと得らるゝが故にと取る時は、大慈大悲は極樂に於て得らるゝこととなる。處がよく注意して茲を御覽になると、此の『歎異鈔』四章の文は、極樂に行くこと得らるゝと書いてあ

は、

如來すなはち涅槃なり、涅槃を佛性と名づけたり、凡地にしてはさとられず、安養にいたりてさるとるべし。即ち信の一念に於て頂いた其の大慈大悲の佛性は、未來安養に到りて顯はるゝ、となるのであります。

一一二

又次ぎには 『大慈大悲を名けて佛性と爲す、何を以ての故に、菩薩摩訶薩は若し二十五有に能はずば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。諸の衆生は畢に得當きが故に是の故に、説て一切衆生悉有佛性と言へるなり、大喜大捨は則ち是れ佛性なり、佛性は即ち是れ如來なり』 二十五有といふ諸の迷界を總括すると廿五通りある。故に二十五有といふのである。菩薩摩訶薩は此の大慈大悲の行を以て、此の二十五有を捨てなければ、阿耨多羅三藐三菩提を得る事が叶はぬ。處が今一切衆生は此の罪惡深重の迷ひの者が、佛が長々御苦勞の大慈大悲の恵みを頂くにより、未來廿五有を離れて佛果に到らせて頂く事が出来る。是の故に一切衆生悉有佛性なのである。又 『佛性をば大信心と名く。何を以ての故に。信心を以ての故に菩薩摩訶薩は則ち能く、檀波羅密乃至般若波羅密を具足せり。一切衆生は畢定して當に大信心を得べきが故に、是の故に説て一切衆生悉有佛性と言へるなり。大信心は即ち是れ佛性なり。佛性は即ち是れ如來なり』

佛性を大信心と名けるとは、即ち如來廻向の信樂の大信心の事なんである。一切衆生は此の御見捨て無き如來廻向の信樂の大信心一つを頂くによりて、助かるのである。處が茲でも今迄六かしく言ふのに係はると、大信心の佛性が我々の心中に無ければならぬなど六かしくなるのであるが、茲なども此の如來廻向の信心が佛性であるといふ丈けてよい。茲なども菩薩を法藏菩薩にすると、即ち法藏菩薩が菩薩の行に於て、三學六度の行を修し、長々我々の爲めに苦勞し盡して下された其廣大の御まことによりて、我々一切衆生が頂けるなれば、即ち一切衆生悉有佛性であると斯く頂かれるのであります。

『和讃』には、
信心よろこぶそのひとを、 如來とひとしときたまふ、
大信心は佛性なり、 佛性すなはち如來なり。

此の信心佛性の『和讃』の示しは『涅槃經』の茲の御文から出て来るのであります。又次ぎには
『佛性をば一子地と名く。何を以ての故に、一子地の因縁を以ての故に、菩薩は則ち一切衆生に於て、平等心を得たり。一切衆生は畢定して當に一子地を得べきが故に、是の故に説て、一切衆生悉有佛性と云へるなり。一子地は即ち是れ佛性なり、佛性は即ち是れ如來なり。』
一子地といふは、一切衆生を一子の如く平等に憐れみ得る位である。之れは聖人の『和讃』の御左訓には
三カイノシユシヤウワカヒトリコトオモフコトヲウルヲ
キチシチトイフナリ
とせられてある。猶ほ茲で先き程より佛性を即ち如來と

言はれてある此の如來は、阿彌陀佛でも善けれども、聖人の御左訓には

如來トマフスハ、スナハチネハントマフスミコトナリ、ネハントマフスハ、スナハチマコトノホフシントマフス佛性ナリ、シルベシ、コノホンフコノセカイニシテサトラズ候ヘバ、他力ヲタノミマイラセテアンラクシヤウトニシテサトル。

とありて、此の如來は我々を助け給ふ阿彌陀佛で申すよりも、此のお慈悲を頂いて我々が極樂淨土に往生して、如來のさとりを開かせて頂く其の如來の意味にて、『諸經和讃』には仰せられてあるのであります。

一四

猶ほ茲で序でに、全體親鸞聖人が常に御示し下さるに、『證卷』あたりで菩薩のことを仰せられる時には、いつも還相廻向の菩薩のことに下されてある。處が又同じ菩薩のことを、『論註』二門偈などに於ては、法藏菩薩の事になされてある。何うも少しをかきさやうであるも、能く頂くと之れによいのであります。何故かと言ふに、我々極樂に往くと、衆生濟度の出来る菩薩のさとりを現はさせて頂くのである。處が阿彌陀佛の法藏菩薩は何處から現はれ下されしかと言ふに、矢張り極樂の一如法界の境界より、我々を助くる爲めに姿を現はし下されたのである。して其のお姿で我々を極樂の眞如法性の境に到らしめ給ふので、即ち我々の極樂に往くは法性法身を境をさららせて頂くのである。して其の境より姿

を現はし下されしが法藏菩薩と、即ち同じことになるのである。併しながら極樂の眞如法性の身では、我々手が届かぬは信仰の對象にはならぬ。そこで其の境より姿を現はして法藏菩薩と示し、長々の御修行により正覺を成じて阿彌陀佛となり、我々を極樂にお救ひ下さるとなるのである。て此の廣大の御哀れみにより、我々が極樂に往き、衆生を一子の如く平等に哀れみ得る身となして頂けるのであるが故に、一子地である。一切衆生は廣大の佛力により、未來極樂に於て、其の一子地を得べき身となして頂けるが故に、其の故に説いて一切衆生悉有佛性と云ふ也云々」となるのであります。又『和讃』には

平等心をうるるときを、 一子地をとなづけたり、
一子地は佛性なり、 安養にいたりてさとるべし。

要するに廣大のお慈悲により我々極樂に往生させて頂けば、大慈大悲を現はし、衆生を一子の如く憐れむ身と仕て頂けるのである。長くなりませ故、之れて切りと致します。

(夏季求道會第五日第一席)



よくよく、煩惱の興盛に候にこそ

告白

北川齊次郎

私は去る明治三十五年、縣の師範學校を卒業して、以來十三年間小學校に奉職して在るもので御座います。(近角先生とは御同郷で、殊に近頃先生の御郷里の學校に奉職して居るので御座います。)數年前より時々先生の御法話を拜聴し、殊に三四年前よりは特別の御引立てを蒙つて居るので御座います。が、丁度(四月上旬)長濱別院大御遠忌の際は、三四日間殆ど晝夜に亘りて私夫妻のために格別の御心配をして頂いて、御蔭を以て遣る瀬なき御慈悲の程を深く頂かせて下され、實に何とも譬へ方なきうれしさを御座います。

私の有難く喜ばせて頂いた心持を、次回の『求道』に述べて見よとの御懇ろなる先生の仰なりしも、私如きもの、告白はとも皆様の御覽下さる様などでも御座いませぬので、御断り申上げしも、たつての御下命でもあり、又斯の如く喜ばせて頂くことも、全く御佛の御慈悲の御力によること、又これを告白させて頂くも、是又御佛の御力によることと思

ひ、卑しき考や拙なき文字をも顧みず、本誌の餘白に載せさせて頂くことで御座います。

さて私が此程來殊に有難く喜ばせて頂いたことを申述べますにはどうしても私の幼少時代よりの家庭なり、境遇の變化を申述べることが必要と思ひますけれども、近來公務多忙なるためと、又餘り多くの紙面を頂くも相濟まぬことと思ひ直ちに近時の状態を述べさせて頂くことでございます。

私の両親は非常に熱心なる真宗の信者で御座いました、私は幼少の頃より確かにその感化を受けましたと思ひます。十九歳の時縣師範に入りしに、當時の修身の先生が大變なる信仰家(こゝに申す信仰家とは、一定の神佛を指すのでは御座いませんで、或る一種の確い信念を持つて御出でなのです)で、先生の講義を拜聴した時間は僅かに二年足らずで御座いましたけれども、私が両親の感化外に、非常に宗教的趣味を持ちしはこの時からで御座います。私はこの時より神儒佛の多方面に興味を持ちまして、絶えずこの方面の講話、さては書籍に耽りまして御座います。そして世の信神者信仰家の話をき、或は經驗物語を讀む毎に、あゝ自分もかゝる信念を得たい、養ひたいと常に思つて居りました。時に倫理哲學を修め、時に基督教に熱中し、或は佛典に耽りて比叡山に通ひ、或は一夏は永平の僧堂に參禪し、或は恩師に就て儒教を研むる等、随分多方面にやつて見ましたが、遂に内心の安心は得られず、かくてはどうしても他力の教ならざるべからずと觀念いたして以來、近角先生の御法話を聴聞させて頂くこととなりまして。かくして時々聴聞させて頂くこと茲に數年、

御佛の御慈悲の廣大甚深なることはよくわかり、決して疑ふ心は御座いませぬけれども、しかしこゝにどうしても内心に一の大きな障礙ありて、安心は出来ませんでした。御本願を疑ふ心は更になけれども、無常觀は運命説に支配せられ、罪惡觀は倫理學が解決して居つたので御座います。かくて不知不識の間に宗教の信仰は修養の手段の如くになつてあつたので御座います。積年先生が御親切なる御論しは總て道理を以て理解されつゝあつたので御座いました。誠に相濟まぬことで御座いました。或時心友某君は、夜を徹して私のために無常觀なり罪惡觀を説いて下さつたけれども、遂に心友の話は理解されて仕舞つたので御座います。

然るに時節到來と申さんか、宿縁が熟して下さつたと申さんか、この春以來今一度近角先生の御話を親しく拜聴したい、吾が内心の苦惱をきいて頂きたいと思ふこと切なる時、先生は三月末には御歸國と承り、實に一日千秋の思ひで御待ち申上げしに、三月二十三日は参りました。丁度この日は日曜でもあり、早々先生の御寺へ参りました。先生は特に私のためにかの歎異鈔第九章の御文を御引き下され、實に恐ろしき位な態度を何て、御懇切に御熱誠に御法話をして下さいました。私は眞に嬉しく有難く思ひましたなれども、しかしどうしても内心に一點齟れぬところがあつて、煩はしくて仕方が御座いませぬ。この思ひを持つたまま御暇申し、近く御目にかゝる時を樂しみに待ちました。四月一日よりは長濱別院の御遠忌で御座います。先生には四月五日より御參詣になりました。その日から御滞濱中私夫婦は毎日毎朝御邪魔を

いたして御懇ろなる御教化に預りました。六日の朝も早々兩人で先生の御宿へ参りますと、先生には御用をさし措き下されて、不相變御懇ろなる御教をなさつて下されました。そして實にこの時の教化こそ實に嬉しく有難く眞に終生忘るべからざる、否死しても忘るべからざる御教化と感じました。實にこの時の御教訓によりて以來、誠に一點の曇りもなく善れ渡り、感謝歡喜の御念佛を唱へさせて頂いて居ります。

家妻積年の病苦に御同情をなして下され、察して下されて、『病は苦しけれども心に思ひ煩らうことはなきか、親や夫の親切を思ふとき如何なる思ひ起るか、家庭に對し親族に對して種々自分がなさんとする希望起るとき、如何の考が起るか、こゝに親にも言ひ知れぬ苦惱あり、この苦惱こそ病苦より何よりも實に苦しきものなり、然るに大悲の御親はこの苦惱を悉く見知り抜いて下されて、實に限りなきの御慈悲御同情を以て救はんと仰せ下さるなり』又私に對しては『私が妻に對する親切も總て相對的のものにして、病苦を除きやらんとするも人力に限りありて能はぬにあらずや、親切心の一伍一什を語るとき、これ涙の種ならずや、父子夫妻間に於ても、思ふこと丈けも語り得ざるにあらずや、心の全部を語り盡しえざるにあらずや、かくて吾は何處にか行き何を頼まん』と、諄々と御説き下されしとき、吾等は實に何とも言ひ能はぬ慚愧感謝歡喜の感油然として起り、覺えず知らず泣いたので御座います。

あゝ私が悪く御座いました、迷つて居りました。長い間私は自分の淺薄な科學の知識や、薄志弱行の修養を矢張り力に

して居つたので御座います。私は心から先生に御詫びいたしました。あゝ四月六日午前九時、長い間迷霧にとざされし吾が煩惱の心中に、始めて眞に御佛の光が徹して下さつたので御座います。あゝ有難や、南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛。爾來尙淺くは御座いますなれども、思ひ出しては御慈悲の御念佛を唱へさせて頂いて居ります。そしてその後も屢々歎異鈔第九章の御文の中『よく』煩惱の興盛に候にこそ』の御手強い御教化がこゝだ〜と思ふときが御座います。がその時即ちかかるが故に御慈悲の御念佛が出来て下されしことを感謝して、又も御念佛を唱へさせて頂いて居りまして、先生の常に御聞かせ下さる『仕て見様なき吾身』を眞に自覺させて頂きます。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

ア、四月六日、御慈悲の御光の徹して下さつたときの感想歡喜はとも私の拙き筆を以ては述べ盡されませぬ。尙甚だ簡略で足らぬことで御座いますが、今回はこれだけで止めさせて頂きます。

御ふみくはしくうけたまはり候ぬ。かやうにまめやかに 大事におはしめし候。返すもありがたく候。まことにこのたび、かまへて往生しなむと、おほしめしきるべく候。うけがたき人身すてにうけたり。あひかたき念佛往生の法門にあひたり。婆娑をいとふこゝろあり。極樂をねがふこゝろおこりたり。彌陀の本願ふかし。往生はたゞ御こゝろにあるなり。ゆめく御念佛おこたらす、決定往生のよしを存せられたまふべく候、なに事ともめ候ぬ。

九月十六日

源 空 『西方指南鈔』

講 話

誠なるかな

(利井鮮妙師法話)

本篇は利井鮮妙師が「昨年の報恩講に際し、行信教授生徒及び同行に對し、法話せられたるものなり、讀者は次項「草木所感」を参照せらるべし

「誠哉攝取不捨の眞言超世希有の正法聞思して遲慮することなかれ」。

今日は例年の通り本校の報恩講であるが、老拙は當年の報恩講にはトテモ逢ふことは出来ぬ、命はあるとしても老病の爲めにトテモ御話などは出来ぬと覺悟していたのであるが、計らずいさのびて諸氏と御話するは、誠に喜ばしく思ふことである。

讀題の御文は老拙に於ては誠に趣味の深い、難有い、無量の感のある御文でありて、近頃は諸方より揮毫を頼まれると大底此の御文を書き與へ、永の後生の道芝は是さへ知れたら出離の一大事は満足であると心得、逢ふ人ごとに此御文の御意を御話致して居ることである、然し此御文は何分漢文の事故、諸氏には十分分りもせうが此中の同行の中でも、愚な文字を知らぬものには困るであらふから、今至極和らけ簡短に御意の程を御話し致しませう。

御意を知りて頂けば頂くほど高祖の御苦勞が頂かれる、高祖大師御一生の間雪の褥や石の枕の御苦勞は、出来ぬことを遊ばされたのではない、軍人などは随分滿州の野に於て雪の中て野宿した事があつたをうだ、唯雪の褥や石の枕のことを知つた丈では祖師の御恩は物足りません、御一生の心血は我的心は是ぢやぞよと御示しくだされ、九十年來の苦は是さへ知つてくれたらよいと、一口に御示しくだされたが今の御言葉誠なるかなや攝取不捨の眞言である。

二

「誠なるかなや」と仰せらるゝは、親がヤンチャ子供にホンマチャゾ、恐いぞ、と云ふ様な夢の様な誠ではない、高祖にかせられては九才の春より滿二十年が間だ、出離の一大事命がけて御求めなされたが、みとめがつかず遂に師匠法然様の御教によつて、彌陀の本願攝取不捨の理を聴聞遊ばされ、イヨ／＼後生の一大事を我手に握り、本當のマコトは是ばかりぢやとの思召のまゝを述べ遊ばされたが、此攝取不捨の眞言である。

三

「誠なるかなや」のかなとは云ふにいはれぬ、涙もこぼれぬ程の思を彰はすのとは、悲みの極をいふには悲しきかなといひ、喜びの至極をいふには喜ばしきかなといふものである。今は本當のマコト是以上の誠はないゆへ「誠なるかなや」と仰せられたのである、世の中には本當のマコトといふものは決してない、そこで眞實のタノミになるものは一つもない、煩惱具足の凡夫、生死無常の火宅よろづのこと、みなもつて、そ

丁度當春は祖師の六百五十回忌の法要を御本廟に御執行遊ばされた、老拙も存生の御暇乞ひに一日なりとも參詣し御禮を遂げたさものと思ふていきましたが、病氣の爲めに一度も其志を果し得ず、臥床の中から遙に御禮していた次第であります、然るに京都參詣の途すがらに老拙を訪ねて呉れた遠國近國の知人が随分ありました、皆同様に御祭騒ぢや、トテモしみ／＼御教化を聴聞することは出来ぬと申さるゝを聞くに付て、

法の園花はさげども山吹の

みのらてちるぞかなしかりける

と口ずさんで、御法事の花は立派に咲けども眞の聴聞する人なきは、山吹のみのらてちるも同じこと、誠になげかはしき事であるとの思を述べて悲んでをりました、併し能く／＼思へば此事は末法の有様として個様あるべき筈であらふ。

御佛のみこゝろだにもまゝならぬ

世と知り得なばなどなげくらん

と口ずさんで自ら慰めていました、御祭騒の様な御遠忌ではあるが其中に唯一つ逢ふた仕合といふことがありました、夫と申すは今度の法要は以前と變り、十日間づゝ兩度とも朝夕坐の二會で、其勸式は無量壽會と申す大切な法要でありました、従前は此無量壽會の式は法華經の御文の儘を御依用遊されてありましたが、今回は本典惣序即ち只今讀題に拜讀致しました「誠なるかなや攝取不捨の眞言」の御文に御改めなされたことあります。

是ばかりは何より嬉しく難有老拙は喜びました、此御文の

らごと、たわごと、まことではない、うそばかりぢや、其日のうちに間違ふか、翌日間違ふか、一年後に間違ふか、二年三年の後に 間違ふか、何れ間違ふことに違ない、然るに攝取不捨の眞言は、是ばかりは誠の／＼誠ぢや、皆さんが此の「誠なるかなや」の身の上になられてこそ御遠忌に逢ふた所詮と申すものである。

夢に金拾ふてさへ嬉しいのに、夫がホンマならどないに嬉しいホンマに嬉しいであらふ、凡夫が淨土に往生する、佛になるといふ様なことは、夢に見られぬ程の大事ぢやが、然るに夫がマコトぢやものイヨ／＼往生が出来る、イヨ／＼間違ない。其請合が此一口の御言葉である、祖師九十年來の御苦勞は此御教化ばかり活々として面のあたり此御教化に逢ひ、我身も今既に御開山様と同じ「誠なるかな」の身になして頂いたと思へば、實に身の置處もなき喜ばしきことであります。

攝取不捨とはオサメトリテ捨テズ、眞言とはホンマの御言葉、觀經に念佛衆生攝取不捨と説きたまふ、是ばかりがホンマの御言葉と申す意である、ドンナものを攝取なさるかといふに、機をいへば男女善惡の凡夫そのまゝでオサメトリテ捨テヌとの御意、此まゝでよいとの御慈悲なれば、我計らひはイラヌではないか、依つて又の御言葉にも「往生ハナニコトモ／＼如來ニマカセタレバコン他力ニテサフラへ、サマ／＼ニ計ヒアフテ、オハシマサンハ、オカシクサフラフ」と仰せられて我等の計ひは皆そらごとである、今すぐに間違ふか後で間違ふか何れ地金が出て、遅かれ早かれ間違ふのならホンマものでない、然るにウソゴト間違ひどうしの心中を間違ふまいと

キバルより、間違のない御慈悲を間違ひないと頂くがよい、此親戀も二十年が間その心配をした、今から思へば『オカシクサフラフ』何と馬鹿氣たことであつたとの御教化です、老拙は或時一人の婦人の手を握り、サア私の云ふことを聞くかどうか、聞かねば離さぬと申した處が、其婦人は私の顔つき目つきを見て、唯もぢくして居る、私はなかく離さぬ親様の攝取不捨は是ぢや、たゞ如來様の御顔や目付を見て、大事の攝取不捨の御心を頂くことを忘れて居らぬかと申したことがある、之は老拙の思ひ付でない、昔雲居寺の如來様が唯善坊に對して、夢に攝取不捨の有様を御告なされたことがある、逃るものを捕へて逃さぬが攝取不捨の御謂れである、不捨とは不縁せぬこと、夫婦の縁は一度オサメ取りても不縁することがある、如來様は一度取りて盡未來際不縁したまはぬ、既に善導大師は三昧に入りて淨土を御覽遊ばした處が大悲の親様は餘行餘善の行者を攝取せず、唯念佛の人のみ攝取して、捨たまはぬ有體を見届けくだされた、してみれば間違ふ氣使はありませぬ、そこを御開山様が、誠なるかなと、御頂きなされたものである、親戀の心中は無明煩惱身にみちくして欲も多し、瞋恚もたけく、愚痴も深くして臨終の夕迄さえずたへず、かゝる造惡不善の身ながら極樂の往生を遂るぞよ、それは何ぞか、攝取不捨の眞言ぢやもの、逃げたくとも逃避はないではないかと、御言葉が『誠なるかなや攝取不捨の眞言』の御こゝろである。

超世希有の正法、これは比べものゝないことを教へ下され

四

ぢや、之なればこそ『他力ニテハサフラヘ』若や我智恵の入る事なれば、高祖は何の二十年が間の御學問を御捨てなさらふぞ、それに聞いた事を覺へて、それを手柄をふに吹聴するものがある、『オカシクサフラフ』と仰せられた、併し無理に阿房になれ不品行せよとのことではない、人は形を見て批評するものなれば、隨分行狀を大切にせねばならぬ、行狀が悪いと人として濟まぬ、又佛法にキズがつく、能々注意せねばならぬ、後生は人間つきあひの、よしあしに用事はない攝取不捨是一つて參らせて頂くのでありますから、超世希有の正法ぢや、依て聞思して遍慮してはならぬぞと誠め遊ばされたのであります(已上)

●確井老婆の往生

多年學會に在りて、炊事の世話を爲し、其後久しく病を養つて居た確井婆一やは、本月八日午前十時、谷中初音町にて、息子夫妻の看護の下に、遂に目出度く往生の素懷を遂げた。學會出身諸君は勿論、學會有縁の同朋中には、婆一やを御記憶の方もあることと思ひます。翌九日拂曉茶毘に附し、十日夜遺骨を學會に迎へ、會員、親戚、知人相會し、聊か追吊の勤行を營み、かれて本誌(五卷十一號)に掲載せる婆一やの告白文を讀み、今は正覺淨華中なる婆一やが長々の辛勞を感謝されて貰つた。婆一やは長々學會に在りて、會員を見ること子の如く、最もよく辛苦しめて呉れたばかりでなく、其入信以來、久しき病苦の間常に變りなくお慈悲を喜び、殊に今春病重りて以來は、其の病苦と生計不如意の間に、益々我が身の申譯無きを語りて、御恩を喜び、此世に一念の停り無く其の極まながら境遇と別人たる感があつた。實に最後迄身を以てお慈悲を知らせてくれたものである。かく一代舎の爲めに身心を盡してくれた婆一やが、今は安養界より我等の上に照覽して呉ると思へば、一入道臺の情切なるものがある。法名は釋尼智正、行年六十一歳であつた。

た御言葉である、物は二つ三つありてこそ比較が出来、一つのものには比較はない、日輪は二つ三つないゆへ比較は出来ません、今度我等が往生を遂る道は一切經探りても、十方法界尋ねても唯一つぢや、比べものゝなき御慈悲ぢや、然るを我心中と比べて、我心中の善き所惡き所と、如來様の御慈悲と比較するは何といふことぞ、十方諸佛の御慈悲を以ても御智恵を以ても比べにならぬが超世希有の御慈悲なれば、小言いはずに唯御不思議く頂く外はない、是が超世希有の正法であるからである。

五

聞思とは、開た通り思へと云ふこと、人によると聞た通りでは覺へたのぢや、それではいけぬ、と、水をさすものがある、そういふ人にだまされぬがよい、御開山様は御助けの御謂を其通り聞き、聞こへたままに思ひ取られたが、彌々助かるの御領解ぢや、夫て往生の大事がさまるのは超世希有の正法の用きであります。

六

遍慮とは、遅はオンシ、慮はオモヒハカル事、ものは遅いと案ぜられるのである、内の亭主がタシカ十二時には歸る筈であるに、一時になつても二時になつても歸へらぬと、行つた先きで呑み過ぎてよも居らぬか、途中で怪我はなからふかと亭主の顔を見る迄は安心出来ぬものぢや、今度の後生は我が嬉しさの顔を見てから、稱名の聲を聞てから定まる様な安心ぢやない、そんな顔や聲を待つは皆我心中と比較すると申すものぢや、我胸と相談する用事はない、聞いたとき定まつた

雜 錄

茨木所感

近 角 常 觀

○私は此度攝津の國茨木別院に招かれて、四月二十八日より五月一日まで法縁に遇はせていたゞきた。其間に少からぬ信仰上の所感を得させていたゞきたゆへ、思ふまゝを話さしていたゞから。

○同別院に本年二月より鈴木道教君が輪番として赴任された同君は去年本山の布教講習會の時、選擇集の話を書きて、阿彌陀如來法藏比丘の昔、私の道心の起らぬこと、孝養父母の出来ぬことを御覽下されしかと、潜然として泣かれた人である。

○同地方東西兩派合併の崇徳會といふ會がある。三十有餘年前の創立にして、地方教會として最古に屬するものである。其春季大會の講話に来てくれと、凡そ三月頃からの依頼であつた。されど私も決心がつかず、久しく未定の儘に過ぎた。○然るに三月二十六日に於て淳心院殿御連枝が御遷化になつ

た。そして同殿は茨木別院の御任職であつた。そこで初めて是非茨木の招きに應ずべく決心した。そして偶然にも参るべくきめた日柄が、同殿の満中陰法要の當日たる五月二十八日二十九日に當つたといふことは不思議である。

○同殿御生前にはあまり深き御話を承る機会がなかつたにも拘らず、御病中には私には忘るべからざる御縁を賜りた。考へて見れば是も實に不思議である。抑々三月二十三日に江州の自坊に於て蓮如上人の御詳月を勤めた。其時御往生前の御文を讀みて、「夫れ秋さり春さりすてに當年は明應第七孟夏中旬頃になりぬれば、予が年齢つもりて八十四歳ぞかし、しかるに當年にかぎりて、ことのほか病氣にかさるゝあひた、耳目手足身體こゝろやすからざるあひた、これしかしながら業病のいたりなり、または往生極樂の先相なりと覺悟せしむるところなり云云」の御文をよむに至りて、胸塞り氣迫りて上人の御思召につまされて、深く御恩を感じ、廣島に往くに御詳月に御本山并に山科御墓の前を空しく過くるは申譯なしとの念を生じて、二十四日京都に立寄つた。そして酬徳會の結願と蓮如上人の御遷化に遇はせていたゞきた。此時初めて攝光院殿の御遷化と淳心院殿の御大恵を承りた。全く蓮如上

人の御引導によりて、兩殿の御縁に遇はせていたゞきたことを私は深く信じて居る。

○其夜皆山邸へ伺つて攝光院殿の棺前に御禮を爲し、光徳院殿に御目にかゝり、此度は急な御遷化により深く無常を悟らしていたゞきたと、斷腸の御愁傷に共に嚴しき御催促を感じて、其後曉暖殿に御目にかゝりて、詳かに淳心院殿の御病狀を承り、腸管狭窄で切開せねば必ず助からぬ、切開すれば萬一好結果を得るかもしれぬと、其代りには手術中に終らぬとも限らぬ、結局醫師の意見にまかすことにしたとの御話であつた。○二十五日日本山晨朝に参詣して、直に臺下に御伺をいたし、一層委しく御病狀を承り、又能淨院殿に御目に掛りつゝある間に、いよゝ／＼本日午後一時手術に取かゝるとに決定したとの電話であつた。そこで御手術前に一度病院へ参りて御目にかゝりたいと思ふて、早速車で病院へかけつけた所、ア、残念なるかな、今一時間前に御手術のために消毒室に御入りなされた跡であつた。梅上連枝令夫人、石原、尾崎兩従者、并に御附の人々が室外廊下に佇立して居られた。幸に刀を執らるゝ醫師に托して、名刺丈を通じて、私が参りたといふことだけは申上げてもらふことを得たは、まだしも何かの御縁と

感じさしていたゞきた。能淨院殿より御慰めの爲、平素御好みの畫幅を御事附けなりたるを御附の人に渡して、御手術の結果如何を案じつゝ、かねて約束のあつた伏見別院講話にゆかねばならぬ時間になつたゆへ辭し去つた。

○其後電話にて承れば、手術は午後五時にすんだとの事、しかし結果は分からぬとの事であつた。されど、とにかく御手術中に何等の異變もなくすんだとの事故、或は豫後好良であれがしと念じつゝ、後髪をひかるゝ思をしながら、其後午後九時京都發で廣島の方へ出立をした。そして翌日は同縣高田郡役所所在地の吉田町へつきて、かねて待受けて下された小早川新一君と神田彦市君とに迎へられて、爐畔に團欒して、しかも小早川君の八才の令嬢が、一昨年なくなつた尊ぶとき臨終を承りつゝ、御慈悲を深く／＼喜ばして貰ふた。後に電報にて御しらせをいたゞきたを見れば、恰も此夜十時前に淳心院殿が御遷化あらせられたとの事であつた。

○後に承れば手術は頗る好良に終りたが、何分衰弱が甚しかりし爲、豫後不良であつたとの事である。二十六日には當御門跡臺下が親しく御見舞あそばされ、大に喜ばれしとの事であつた。かねて枳敷邸より御入院の時、つく／＼本山を禮し

て今生の暇乞なりと申され、又紅梅の下に籠をとゞめ名残を惜しみ、梅の一枝を折りてくれと御附の方に申されたとの事であつた。今ははや安養淨土に御照覽下さるゝを仰ぐばかりである。

○かくの如き御縁をたまはりたるものゆへ、せめて御葬式に御遇ひしたいと思へども、歸路廣島可部の棚谷方の深き／＼御縁に引かれ、寧しろ有縁の御縁をいたゞけるを喜び、京都に立寄りて大谷の御中陰檀に参詣したる日が、恰も中陰御勤のすんだ時であつた。歸路京都に立寄りたるを御縁として、往路より深く／＼心中に期して居つた山科の蓮如上人の御墓に十二年ぶりに参詣さしていたゞき、又實如上人證如上人の御墓へも参詣さしていたゞきた。

○しかるに恰も月忌たる四月二十六日に當りて、本山よりは大阪南區教育會に出席をせよとの事、大阪へ来て見れば難波別院にて御遠忌御親修中にて、二十七日には臺下に御伺して、亦恰も大建夜の前に本堂にて一場の御縁を一般の参詣者に對して結ばしていたゞきた。

○そして二十八日約の如く茨木別院に来て見れば、満中陰法要である。何事も不思議ばかりで茫然自失するばかりである。

御庭の牡丹は正に満開を過ぎて、主人を失ふたる寂しげである。滞在中に風雨のため全く落花泥土に委した。又何とも言へぬ寂しきである。

○御附きの方、乳母の方等三人連れにて京都より参詣をいたされた。さけばさくほど涙の種である。我乍ら不可思議の御縁を仰ぎたてまつる。今生夢の中の契をしるべとして、來世のさとの前の縁を結ばんとなり。われ後れれば人に導かれん、我先きだたば人を導かん。生々に善友となりて共に佛道を修せしめ、世々に知識となりて共に迷執をたんとある『唯信鈔』の御言の儘を事實にいらして下さるのである。

○茨木に來りて最も喜ばしきことは、此近所は蓮如上人の御舊蹟地の多きことである。富田殿も近傍である。佛照寺も近傍である。出口も近傍である。毎朝『御一代記開書』を『歎異鈔』と共にいたゞきて居りながら、まだ富田殿が何れやら参りもせず、参らうともせなんだといふことは、實に申譯ないといふことを深く感じさせていたゞきた。『歎異鈔』の一文一句につきて深く味はせていたゞく様に『御一代記開書』につきて注意が足らぬことに慚愧さしていたゞきた。

○全體關東における親鸞聖人の御舊蹟を注意する如く、關西

ならぬことを話した。承れば茨木別院として御住職なされしは此度が初めてであるといふことである。即御初代と申さねばならぬ。かくの如き場合に御引寄になつて、此の如き御話をさして貰ふといふは、よくの御因縁である。

○三十日には早朝より近傍の御舊蹟に参詣した。先づ富田殿即教行寺へ参詣をした。教行寺は石山戦争の時、大和に移りたれども、眞の所はこゝである。『御一代開書』にある富田殿はこれである。『教行信證大意』をかゝれたるによりて教行寺といふ説である。御手植の梅がある。鹿の子の御繪を拜した。同じく舊家につきて藤枝の御名號を拜した。即ち藤の枝をしがみて御書きになつたのである。實如上人の御名號もある。内佛の御禮を上げたが、疑もなく是亦蓮如上人實如上人の御筆である。又蓮如上人が吉崎を焼出されて御遁れになつて、若州小濱より御上陸ありて、初めて此地に御說法をなされたとき腰掛けたまひし石がある。上人の御流離關西のことを思ふて見れば、我等は實に粉骨摧身せねばならぬ。

○幸に近傍の利井兩老師の御寺を尋ねた。恰も行信教校の午前の授業がすんだものと見えて、何か高々と一叩する聲がきこえた。先づ老院明朗師に御遇ひした。いかにも達人大觀と

に於ける蓮如上人の御舊蹟につきて、全體人の注意が足らぬ。同じことが、北國に於ける蓮如上人の御舊蹟を注意する如く京阪地方の蓮如上人の御舊蹟につきて注意せぬ。恰も二十四日は河和田の唯圓坊開基の報佛寺より招を受けて、昨年建碑された道場の池の舊地に詣て、傳道して來りたる私は、先づ大阪初め悉く蓮如上人御苦勞の舊蹟たることを、今更の如く深く感じさせていたゞきた。

○大阪建立の御文といひ、又前にも述べた御文といひ、それにつけても我等居住の在所々々の門下の輩に於て、おほよそ心中をみよぶに、とりつめて信心決定のすがた一向これなしとみをよべり」とか、「つゝあるは當年寒中には必ず往生の本懐をとぐべき條一定と思ひはんべり、あはれく存命の中に皆々信心決定あれがしと朝夕おもひはんべり」とか、實に切りつめた上人の御思召をいたゞきて見れば、髣髴として此近傍を御苦勞下されし様子が見える様である。

○淳心院殿の御手引によりて、此の如き御舊蹟地へ御引寄せ下さつたことを感謝し、又御教化によつて淳心院殿の有縁の崇敬部下信徒に對する思召も御同様であることを傳へて、共に深く同殿御遷化の御縁によりて、我も人も御跡を慕はねば

いふ調子で、自分は八歳の時から住職して、老人と交際したゆへ、凡そ百年間のことは面り桑滄を閲したからといふて、色々世上の變遷、特に人心の變化甚しきを慨歎された。又石山戦争などは、恰も今日車夫馬丁の政治を談すると同日の論で、あながち熱信ばかりとも言へぬとか。宗祖の朝家の御爲國民の爲念佛すべしの教訓でも、中興上人の王法仁義でも、一寸申されしまでにてあまり其方面は申されないのである、しかし一寸申されても人が深く信じたのじやと申された。

○鮮妙和上は病中にも拘らず、是非遇ふとの事であつた。明朗師の明朗たるは待設けて居つたが、鮮妙師のいかも鮮妙なるには實に一尊ふとかつた。私は全體老人はすきである。いかにもやさしき目と口もとは一見大になつかしく思ふた。徐に口を開きて、私も耳目手足身體何れも薄ふりました、近々には御淨土へ参りして……といふて泣かれたには、實に生きた『歎異章』第九章の御教化をいたゞきた。又色々世上にあらはれてくる有様は、實に佛説のまゝ、恰も活動寫眞の様じや。『歎異鈔』にもある通り、佛説まことなりけりと知られて唯信佛語と仰くばかりと申された。且つ夫人やら令嬢を紹介されて、菅瀬たゞはこれの姪であるとして、色々御縁の禮

を述べられたには、思ひ出して泣かされた。病氣にさはらぬかと案じられたが『御本書』につきて何れの處か最も御感じになつたところを示されたいと申したれば、誠哉攝取不捨眞言聞思莫遲慮をくりかへし、誠なるかな〜といふて、感涙に咽ばれた。和上の御話を別項講話欄に掲載してあるゆへ見て下さい。其他懇切の饗應を受けて別を惜みて辭し去つた。

●近角傳道日割

近角は去月二十五日夜七時半發程、左の如き豫定で主として九州方面傳道の途に着きたり。
○五月二十五日夜 出立、○二十五、六日 大坂拓殖博覽會、市教育會其他 ○二十八、九、三十日及び六月一日 茨木別院 ○二日 廣島至徳會 ○三日 福岡土曜會 ○四日 福岡大學佛教青年會 ○五、六日 福岡博福信青年會、看護婦會 ○七、八日 大隈有田家 ○九、十日 飯塚學生會 十一日 八幡江田常照師方 ○十二日 豊前戸畑 ○十三、四、五、六日 長崎醫學專門學校其他 ○十六、七日 福岡縣羽犬塚 ○十八、九、二十日 熊本第五高等學校青年會 ○二十一、二日 熊本縣人吉堤家、○二十三、四、五日 鹿兒島第七高等學校青年會
即ち本誌發行の頃は熊本附近にある豫定である。猶ほ本月中には歸京、六月一日求道學舎日曜講話より開始の筈

信仰談話會質疑應答錄

本篇は前號所載「佛智不可思議」の講話と引き續きての談話録なれば、相照して讀まれたし。

(問者一) 私は家父などの考へと私の考へと、濟まないが違ふことがあります。其の場合、自分の考を通うれば家父の意見を無にする事となり、さればとて自分が折れれば犠牲になつたやうて、をかしな立場となり、いつも越て私は行き詰まる。夫れを密骨に交に話すと、父はいつも理屈を言はず親の計らひに任せ、と言ひます。……

(答) 夫れはよく内容を承つて、申しても宜しいが、親御の信仰状態にもよると言ふものゝ、私は親御の言はるゝやうに言うてよいと思ふ。其の右にも行けず左にも行けず、彌々行き詰まる處に、最後の血路が有ると信ずることによいでは有りませぬか。自分は今此のような逆境に居る、前途の見込が無い、其の行き詰まる自分の爲めに、見捨て給はざる廣大の大悲がまします、と頂く處が其處で有ります。

(問者二) イヤ其處迄行けぬので、私は困るので。

(答) 其の行き當り、分る處迄ゆかなくてははいけません。

(問者一) 事毎に夫れてやつて居ります中に、或時は夫れが分るやうてあります。……
(答) あなたは其處を、未前に分らうするから可かぬ。今私があなたの御しやる丈けて言ひますと、我々が慈悲頂いた味ひから言ひますと、我々が人生の逆境に行き當り苦しむといふのも自分の方の計らひなれば、又あなたが此の慈悲を頂かずに、親の言に聞いてやつて居れば、必ず行き當り困

ると思はるるのも、自分の計らひである。……

(問者一) つまり私は何も分らぬのです。

(答) そうです。此方は何も分らぬ者なのです。其の分らぬ者故遣る瀬無く思召して下さるが、佛の慈悲なのであります。此方は本來何も分らぬ者、——私など、自分も相當に人に善く出来るやうに思ひ、人も斯くして呉れるだらうと、思ふるのでありますけれども、思ふやう人も善く仕て呉れねば、自分も出来ぬ。出来ぬから苦しむ自分を、其の仕て見やうなき有様をよく知召し、其者を捨てぬとのお慈悲が、佛の廣大のお心なのであります。夫れて一度此のお慈悲に氣がつき、夜が明けて有難いとなると、茲で飽く迄も捨てぬとのお慈悲故、此の度びは此世のみならず、死後迄も之れてやらせて貰へるのです。之が實に難有い。此方は死ぬのがこはい奴、其奴が遣る瀬無きお慈悲一つで此の人生が通うらせて貰へるのであります。「人生の事は何程のことも無い、親のする事に任かせて置け」ては、之を自力でやると、「何んとならうと人生はかゝる處だから我慢して居れ」といふ事になる。而も夫れて自分の意見が、少しでも折れるかといふに毫末も折れて居はせぬのである。處が今佛の廣大なお心を頂いて、其の遣る瀬無き思召しに任かすといふは、何も苦しさ處を我慢して通うせと可き場合ひには、大に動かれるやうになるのである。……

(問者一) 先生は直ぐ其處に行かれるから宜しきも、私など其處に行くのが甚だしいので……

(答) 夫れは其の遣る瀬無きお慈悲に、夜が明け無くては

いかぬ。私ぢやとて、何も始終心が「らく」である譯では無けれども、否時には大に苦しき時がある。て其の苦しき處あるとすれば、夫れにぢつと辛抱して居るより外は無。此間も誰やらが、信仰など甚だ窮屈で困ると言はれた。現に本年一號の『求道』に告白を書かれた清水さんの奥さんが言はれた。「お慈悲の無い前なら、今の苦しみは無からうに、今では喜ばせて貰ふばかりに、佛にすまぬと思ふと、欲する儘に行けぬ」と言はれた。之が人を相手に「欲する儘に行けぬ」ぢや無く、信する者を哀れみ下さるお慈悲に對して、行けぬのである。信仰の味ひはこんなものであります。て先き程申した「佛天の御計ひ」が、時によると甚だ「らく」で無い。私など「佛天の御計ひ」を言うた時は、一番苦しき時で有つた。自分が信仰上より人の爲めに仕た事を、人は皆な反對に取り、誰も信仰の事は耳に入れて呉れぬ。自分が信仰上よりするだけ、人が理解して呉れぬ。そこで私、「人に信仰を頂かさうなど、仕たのが入らざる私の計らひであつた」と——殊に思はせて貰つたのは、親鸞聖人が「佛天の御計らひ」を言はれた當時の東國の信仰上の亂れであります。殊に御一子善鸞上人が、其の間違ひをせられた事は、聖人にすれば如何にお辛らかつたてあらう。聖人にすれば念佛成佛是眞宗、是れ一つを知らせんならんと、長々東國に於ける御苦勞であつたのに、肝腎の御一子善鸞上人が、夫れをこはして走るかれたとは、如何にもお辛らかつただらう、と思はせて頂いたのであります。して之に對する聖人の御言葉が、前號講話に申す「佛天の御計ひ」といふ御言葉であつたのである。此の佛天の御計ひに任かせるといふ、

任かすことの出来るのは、まかすことの出来る偉大なる御力故に、まかす事が出来るのである。此の間も誰かに申したのてありますが、私共が人に對し、何か濟まぬ事、喻えば借金でもして、之を先方に出かけて斷りを言はなくてはならぬとする。處が此方では取つたり措いたり、濟むとか濟まぬとか、種々に善し惡しの計らひを廻らして、先方に行くと、先方では此の事は自分の計らひに任かせて置けと言はれる。併し其の親切は有難いが、夫れでは自分が濟まぬと思ふと、何うしても向ふの言に従へぬ。處が先方は甚だ氣のよきことにて、突然自分の方にやつて来て、此方が濟む濟まぬと氣を揉んで居る矢先きに、其事は忘れたるが如く、甚だ無邪氣に話して遊んで居らるゝ。夫れでも此方は其事が心に在るもの故、入らざる私の善し惡しの計らひを止めやうと思つても止まらず、心が落ちつかぬ。處へ向うは此方の其の思ひを察して「自分は實は君の心をよく知つて居る、君は屹度あの事を苦しんで居るのだらう。君が自分の爲めに、夫れ程に氣を揉んで呉れる心は、能く分つて居るが、併しあの事なら善きも悪きも、自分の考へに任かして置いて呉れ。自分は實は君が其のやうに心配するのが氣の毒な故、先達てもあのやうな事に言つたのである。實は自分が今日出て来たのも、君が色々自分に對し氣に病んで居るのが氣の毒な故、自分は何とも思つて居やせぬと、さりげ無く自分の方より出かけて来た譯なのである。何も思に着せる計りに、出て来たので無い故、自分の此の心も受けて呉れ」と、之を言はれた時には、如何なる者でも、「あゝさうであつたか、夫れ程迄に向ふは親切に考へて呉

れるのであつたか。之に對し彼是れ思つて居つたは、實に申譯なかつた」となる。故に善し惡しの計らひの止むは、善し惡しの計らひをする此方の心を知り抜き、其の心根を哀れんで、飽迄其の者に大悲を以て向うて下さる、遣る瀬無き佛の心を頂かぬ事には、駄目なのであります。全體私は物事を非常に氣にする性質である。其の癖甚だ横着に暮して居るのであります。此間も或方に手紙を書く事を頼まれて、書かぬならぬと思つても、何うしても書けぬ。心に甚だ濟まぬことと思つて、顔を見てから言つては言ひ譯になる故、一寸人に傳言して、「濟まぬがまだ書いて無い」といふ事を傳へて貰うた。然ら言はれて見ると、其の方にすれば、「ア、然うだつたかな」と、夫れ丈けてある。又人がいつか自分の仕てやつた事を何う思つて居るか知らんと氣を廻はして、思つて居る中が心がらくて無いが、思ひ切つて「君、いつか斯ういふ事が有つたが、あれを君は何う思つて居るか」と打出し、「イヤあの事か、あれは君の親切を常に深く感謝して居る」と言はれてみれば、「ア、然うだつたかい」と夫れ丈けてある。て我々に此の善惡の計らひ心のある事を向ふの方より先きに知り抜いて、其の者を見捨て下さらぬ慈悲に夜が明けぬ事は、苦しいのであります。此の人生の生活上の苦しみも苦しみが、此のお慈悲に夜が明けぬ苦しみも、中々苦しいのである。其處になるとかの生沼夫人であります。(求道本年第一號 泔哀善巧錄參照)此の方は長らく茲にお出下さる若き御婦人で、今春來鎌倉で病を養ふてお出でになるのであります。此の頃時々御傳言がある。此の間も『歎異鈔』の九章を大きな

紙に書けとの御依頼で、夫れは以前に私の書いて差上げて置いた名號を形見として御長子に遺し、御次男の方には、此の『歎異鈔』の九章を遺し度いと御希望であつた。私は假名は誠に下手で、生沼さんには耻しいのであります。夫れは生沼さん日書いて差上げて置いたやうの事でありませぬ。夫れは生沼さんは御病氣で、自分は何時死ぬかも知れぬ。死ぬと思ふと、九章に

佛かねて知しめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他方の悲願はかくの如き我等がためなりけりと知られて、彌々たのもしくおぼゆるなり。もうこの御一言である。先達て小出さんが、お見舞に行かれた時、病床より起き出で言はれたといふのも、此のひと所である。佛かねて知召してといふ此の御言葉が無ければ」と言ひてあとの言は續かず、ほろ／＼と泣いて喜ばれたと言ふのであります。斯く佛兼ねて知召して、初めより煩惱具足の凡夫と言つて下さるお慈悲故、あなたも心配する事は無いでは無いか。人に物を頼むに、相手が「よし／＼分つた」と言つて居るのに、「イヤも少し自分の言ふ事を聞いて呉れ」と念を押さなければならぬは、相手がまだ自分の心をほんとは知らぬと思ふからなのである。處が今佛は善いも悪いも汝の心は皆な知つて居る、知つたればこそ、其の汝を救ふ爲めに現はれた汝を救ふ爲めの佛であると、仰しやて下さるのである。爾るに皆んなが、之れ丈けなら思ふ盡に持つて来い故、之れ丈けて止めれば、よいのであるけれども、屹度何か此のあとに引つつけものをし、妙な處に船を着けようとするから

い、かぬのである。設へば念佛を稱へて病氣がよくなり長生きが仕度い、念佛を稱へて心が「らく」になり度い、など、自分の心を氣持よくする爲めの念佛ならば、義無きを義とする處でなく、大に義のある念佛である。夫れ故義無きを義とするといふ事は、此のお慈悲に夜が明け、此方がすつかり取れ無くては其味ひが分らぬのであります。處が又あなたと言はるゝ事も、一面無理で無い。今日一般には他力の偉大なるお力なる事を説かずして、唯他力に任せよ／＼と説いて居るのである。其本體の如何なるお力なるかを聞かずして、之に任せられぬと言はるゝのに、更に無理は無い。夫れ程迄に知召す廣大のお慈悲なる事を言はずして、唯無暗みに手を放せ／＼といふ事は、かりを言ふのである。夫れでは手を放すと墮ちるからこわい故放されぬ。去りなが手足を放しても、確かり背後よりかゝえて、下さる廣大のお力まします處に夜が明けた時には、何しに今迄頼りにならぬ物を後生大事と攫まえて居たかとなるのである。併し凡夫の身は、一旦お慈悲に夜が明けさせて貰へたからとて、計らひが止む譯では無けれども、信の上は結局は此の遣る瀬無き思召し一つに打任かせて其處が通らせて貰へるのである。實際になると苦しみの中より、無理々々大悲に引つ張られて其處を通らせて頂く位ひの有様であります。併し茲をお慈悲に夜が明けずに無茶苦茶にやるのでは、我慢である自暴である。云々。

(問者) 設へば何か解決が着くと、着いた、着いても何處と無く淋しき處があります。設へば人の方へ設へば父なら父の方も問答して居たと、何うしても淋しみの取れぬ處があります。併し矢張り自分ではお慈悲頂いた境であらうと思ふのでありますが、……

(答) 一念は、自分の方が悪かつたとお慈悲に夜が明け
て今迄の思ひが融けて仕舞ふのであります。夫れを、そんな
風に言はず、あなたが慈悲に気がついた自分の心持の上よ
り言はなくてはいかぬ。早くいふと、あなたが親は勝手なも
の、親戚は不親切なものと思つて居られたとする。すると其
の事が、あなたが慈悲をさかされて、相手が悪しくても此
方が許すと變つたか、但しは自分の方が悪かつた、申譯無
かつたと變つたか……

(問者二) 其の變りが私に有つたのであります。

(答) 夫れでは、あなたは慈悲を聴聞して、何う變つたか。

(問者二) つまり、自分に人に對して一つとして善い事が出来ぬと……

(答) 夫れでは、向うがあまりいふ態度で来るのも可かぬが、
然う言ふ自分にも夫れが出来るか、出来ぬ、とてありますか。
(問者二) 然うてあります。それで續いて申しますに、私に斯る問題に苦しみ
て、此の七月頃より此の學舎に来るやうになつたのであります。夫れはかゝる苦
しみを解決するのが宗教である、宗教によれば何とか苦しき心が直るだらうと、
參つたのであります。然うして居る中にも、何うしても私の計らひが止まぬ。
私の計らひと云ひますは、人と我といふ考へてありまして、夫れが何うしても止
みませぬ。自分の淺間しき心の上に、如來のお慈悲は直接に喰いついて下さるの
であるとの事が如何にしても分りませぬ、常に人ばかりを眺め又佛に向うの方に
眺めてばかり居ります。夫れ故毎朝家に歸りて、今日ば之れだけの事をやらうと
思ふても、必ず豫定通りに行かず、又偶に皆くゆくと、自分ばやれたと、直ぐ誇
る心が起ります。又他の者が自分の爲めに何か善き事を爲て呉れたりすると、直
ぐ何彼奴ば住てやつたと思つて居ると考へる。結局言ふと、此考へが毎日ブツと
連なり、毎日の日暮しが善い悪いといふ事の外に無い。して其の善いが
いつ迄も善いてなくして、必ず悪くなり、又悪い方が善いと變はるためしは無
く、益々悪くなるばかりである。茲に於てか私は、之れが人間誰れもの境であ
る。して其境を自分で止められるかと言ふに、何うしても止められぬのが、此の

れず、又汝偶々心が「らく」になれば、「らく」になつたと喜ん
で居るが、其の汝の喜びも浮いた喜びである、夫れも我はよ
く知つて居る、との遣る瀬無き佛の仰せなのであります。て
此の仰せを、夫れは世間の者の事である、他の者の事である、
自分は既に心が「らく」になつて居る、と人ごとに仕て仕舞は
ずに、世間が汚れた「涌かし蝨」の中の蛆虫なれば、其の中に
居る自分故、自分も矢張り蛆虫なのである。て茲で自分と世
間との間に、少しも分ちが這入ると、自分丈け横の方に出て
仕舞うていかぬ。此の廣大の仰せは、今現に自分が斯く善し
悪しの計らひに惱んで居る、此の自分に向ひて夫れ程迄に言
うて下さるお慈悲と知れた一念に、あゝ有難いとなり、夫れ
で初めて夜が明け、現に苦が無くなるのであります。爾るに
茲で動もすると皆んなが、苦が無くなれば、苦の無くなつた一
方丈けしか見ぬからいかぬ。設へば我々が人に隔て、苦しん
で居る時、相手が夫れにも係はらず、他く迄親切に自分に對
して考へて居て呉れる。其の親切に氣がついて、「濟まなかつ
た」と分れば、今迄の胸のややくやは晴れ、苦が無くなる。
此の時、自分の苦が無くなつたよりも、其の疑ひ隔て、居た
自分に對して、他く迄夫れ程迄にして、遂に自分の疑ひの取
れる迄導いて呉れた其の人の恩を思は無くてはいかぬのであ
ります。茲は實に他力が悟りにおちる間違ひ易き處にて、即
ち「歎異鈔」にも、

煩惱具足の身をもて、さとりをひらくといふこと。この條
もてのほかのことにさふらふ。云云。
と指示し下されてある。私はよく實驗の信仰といふことを言

人間の善惡の心である。偶々善いと思ふ事ありても、一念夫れに満足心を起す
なり、忽ち其の善が消えて仕舞つて皆な駄目になる。あゝ實に佛は此の境を哀は
れと御覽下さるのか、此の淺間しき境に引つゞき、此の暗い心に何時迄も、喰つ
いて居ては、自分は何うなる」と一念ふと思つた時、ハツト俄に有難くなり、今
迄は暗い心に引着いて居て何うしても離れられ無つたのが、其時一念に恰も月あ
かりに夜の明けた如く、今迄の闇の心が一時に光りに融けた心持になり、如何
にも心中が明るくて、今迄の心中の争ひの境が明に目に見えるやうになり、あゝ
實に茲ぢやなと、茲で心の境界が一變したのであります……

(答) ては、あなたは客觀的に仰しやる故、氣をつけなく

てはならぬのは、あなたは、「ブツと思つたら有難くなつた」
と言はれる、茲をも一つ申さなければならぬのであります。如
何にもあなたの仰しやる如く、善いは善いて煩惱を起し、悪い
は悪いて煩惱を起す。之は人間の心の裏表で、其の善ければ
よい悪しければ悪しきで煩惱を起し、何時迄も夫れで善くな
れぬ、其者を見捨てぬとの廣大の仰せて夜を明けさせて貰ふ
處が肝腎なのであります……

(問者二) イヤ夫れが私には、其の氣のついた一念に、恰も暗みより抜け出た
やうにすつと心が「らく」になつたのであります。

(答) なつたと云はず、人ごとにせずによくお聞きなさい。
今斯くあなたが言はるゝ如く、其の善きにつけ悪しきにつけ
煩惱を起し苦しんで居る。其の有様を哀はれと眺めて、下さ
る佛が阿彌陀佛にてまします、といふ茲一所が肝腎なのであ
ります。夫れが一寸間違つて、あなた悟りにおちると、佛の
お慈悲の方は消えて仕舞つて、自分の綺麗なつた心丈けに
なる。頂いた今とて、自分の方は悪い心ばかりなのである。夫
を今も哀れと見て、下さる廣大の佛にてましますのである。
此の廣大な親の前には、如何なる親を捨てる不孝者も捨てら

ふのであります。此の私の言ひ方を意味を取りぞこなつて聞
かれると、動もするとのさとりになる。自分は朝夕念佛を
稱へるでも無くして、「自分はもう分つた」と、うつかりす
ると、悟りにおちるのである。故に茲は初めのお慈悲に氣の
ついた一念によく氣をつけて、初めの一念に、斯く淺間しき
私を哀れみ給はる佛にてましますと、我が淺間しき心の上へ
直に佛のお慈悲を仰ぎ、恵みを頂き、我が心を懺悔して、あ
やまり果つる處が肝腎であります。さて斯く、お慈悲に夜が
明くる方の間違ひになると、悟りにおちるが、又一方、此の人
生の苦しきを念佛を稱へて辛抱するのであるとなると、心の
「らく」になる方の間違ひは無けれども、之では修養の間違ひ
に落ちる。然う言はるゝ人の心では、強ち修養の積りては無
けれども、之では結局念佛稱へて我慢することとなり。終養
になる。又今言ふ如く、あなたにすれば、今一步で悟りの間
違ひになり、「自分は悟りたも、世の中は悟らぬ者が多くて困
る、如來は夫等の者を長々お待ち受け……」といふやうなこ
とになり易くていかぬのである。夫れで今現にあなたが氣が
ついたと言はるゝ一念でも、「あゝ今迄自分は親を怨み、周囲
を怨んで居たが、怨らむて無かつた。今迄自分の氣に合ふ者
は嬉しく、イヤな顔する奴は皆なイヤであつたのであるが、
あゝ之れ皆な自分が悪かつた」と、茲で非常に懺悔心が起つ
て來べき處なのである。そこで其の一念に自分の方があやま
り果て、心がすつかり「らく」になるもの故、浮つかりすると
茲で「煩惱具足の身を以て、さとりを開く」と、こゝ非常に誤
り易き處なのであります。夫れも眞に實驗的に慈悲が頂け

て、然らざるならまだしもよけれども、唯も慈悲の筋道丈け聞いて、夫れが一寸心にはまり、「あ、自分はもう之れで悟れた」となる者さへ出来て来る。仕舞ひには「我々は悪いけれど、悪いから悪い者を助けるとのお慈悲でますのであります。故に悪くてもよいては無いか」といふやうなことにさへなつて来るのであります。又今の修養風の間違ひにすると、結局「我々の思ひと思ふことは皆な計らひである、唯廣大の御計らひに任せ奉りて、我々に於ては念佛稱へるのみである」と。此の任かすが、佛のお慈悲に夜が明けた上の任かすてない、修養におちるのである。『歎異鈔』の指示には、

彌陀の誓願不可思議に助られ参らせて往生を遂るなりと信じて、念佛申さんと思ひ立つころのちこる時、攝取不捨の利益にはあづけしめたまふなり。

彌陀の誓願不思議に助けられ参らせて、往生一定と夜が明くる處で、南無阿彌陀佛々々々々と念佛を喜ばせて下さるのである。此のお念佛である處で有難いのであります。

(問者二) 私などは此の淺間しき我々の境、之を見て佛は此の者を哀れと言つて下さるのかと一念気がついた時、何となく今迄来たものに歸つたやうな感じが仕たのであります。

(答) イヤ、とは外で無い。あなたは今迄他力を聞いたもの故、讀んだもの故、いつでも私がお話する度に、あなたは屹度「分りました」と言はれる。私は「やんと分つて居る。あなたも佛が佛敎國故、何もかも皆な聞いて知つて、聞き慣れて居られるのである。夫れ故私の處にお出になつて、私が際を立て、お話すると、聞く度々にあなたは驚いて、「分りました

是非一度根柢より夜を明けさせて貰はなくては可かぬのであります。一度夜を明けさせて貰うたのだと、後から苦みが來ても、お慈悲で追ひ拂はれるけれども、茲の處で夜が明けたので無いと、苦しいけれども、之も佛が爲さしめ給ふて、ぢつと我慢して茲を通るとなり、之では何時迄たちてもお慈悲に心から夜が明けるといふことが無い、今日の人の信仰々々と言ふのは、動もすれば之れに聞えるのであります。即ち何も彼も皆な佛が爲さしめて下さるのだと言ふ時は、病氣になりて着物着て居られるのも御恩なれば、藥が飲めるのも御恩である、結局病氣するのも御恩なれば、死ぬのも御恩と言は無くしてはならぬやうになり、即ち何時迄経ちても心の夜が明け、お慈悲で「らく」にさせて頂くといふ處が無い。然ては無く、此方は病氣で苦しい仕て見やうなき者なのである、其の病氣で死ぬる苦しき有様を知り抜かせられ、死んだ先き迄もお見捨てなきお慈悲と頂かせ貰ふ時は、茲の處で病氣で苦しの中からも、此のお慈悲一つで充分意を安んじ、今迄の苦ししいの夜を明けさせて貰ふことが出来るのである。處が茲の處で夜を明けさせて貰ふ事無しに、今の爲さしめ給ふ丈けになると、澤山借金を抱えて居つて、返へさんならん〜と内心苦しつ、其の事は黙つて隠して置き、斯く澤山金を貸して下されたも御恩だ〜と言ふやうのことになり、之では何程「悪しくてもお助け〜」と抑へて見ても、本當に安心の出來ることは無いのである。然うでは無く、此方は返すべき借金も返されず、何うにも仕て見よう無き其の苦ししい心中を、夫れが哀れである、其の苦ししいのが最もである、夫れだから

た〜」と仰しやる故、私はまだ本もので無いと思つて居た。

處が今度は何か深く感ぜられたやうだと思ふ割合ひに、今のお話に罪惡觀が出て來なかつた。我々が苟も此の遣る瀬無きお慈悲に遇はせて貰うた上から言ふならば、親は今迄長々此私にお慈悲を届けやう〜と、お慈悲の上より長々御導きをして下されたのである。然るに今迄長々親にさからつて此のお慈悲を頂く事をせず、今になりて漸く気がついて、「分りました」は甚だ相濟まぬ。そこで「あ、長々私が悪うムりました、申譯無つた」とあやまり果て、此お見捨て無きお慈悲が有り難いとなり、今の『歎異鈔』の「彌陀の誓願不思議に助けられ参らせても云々」の御言葉が出て來るのであります。併し之は私が今言はぬかて眞に頂かれたのならば必ず後に分るのであります。茲を今言つて置かぬと、今度苦しくなつた時は、『此の間は分つたのだけれど、もう駄目になつた』と、又々ひどく苦むことになる。な〜に、此方は頂いたあとかて、矢張りもとの仕て見やう無き奴なのである。其者が其者をお見捨て無き佛の親心、此の遣る瀬無き御心を知らせて貰うて、安んぜさせて貰うた丈けにて、私の根性は何處迄も仕て見やう無きもとの根性のまゝなのであります。

又初めの方にすると、親の言はるゝのは、信後のことを信前に言はれるのだから苦しいとなる。併し茲で「苦しいけれども此の苦ししいは凡夫の有様故、已を得ぬ。此の苦しき人生故、茲を佛のお慈悲一つで通らせて頂くのである」と、斯く頭より言つて仕舞うと、其の苦しき處がお慈悲で夜が明けさせて頂けることを知らずに、通つて仕舞ふ事となる。茲は

其處を救ふといふ親であると、此のお見捨て無きお慈悲一つを承はると、此のお慈悲一つで其處を夜が明けさせて貰ふ事が出来る故、安心させて頂く事が出来るのである。之れで無いと、如何程お慈悲〜と言つても、結局空になつて仕舞ふのであります。

(問者二) 其の境に行けば、其の境が分ることと思ひますも、私はまだ……
(答) 境は他力では言はぬ、境は禪宗で言ふのです。親鸞聖人は「信卷」にも、
一念とは斯れ信樂開發の時尅の極促を顯はし、廣大難思の慶心を彰す。

と仰せられ、又一念の時に攝取不捨とも言ひ、又蓮如上人は八十通の『御文』殆んど残らずに、一念の時八萬四千の光明中に攝取し給ふと仰せられてあること故、境と言ひてよさそうであるなれども、眞宗では境といふことは全く言はぬ。唯斯くの如き我々を、飽く迄御見捨て無きお慈悲一つを、常に喜ぶこととてあります。故に境といふ言葉は用ゐぬ方が、よろしい。

(問者三) 夫れで私もあ、とから考へたのであります。自分は自分が悪いと考へて其の境界に入らせて貰ひ、其の入りて貰つた有難味を思はぬ、之てはをかしと思つたのでありますけれども、心は一向苦しきならぬ……

(答) 處が夫れが今苦しきなくとも、あとで苦しきなる。今は「らく」であつても、今度苦しき時は大苦しみになる。故に今より其の苦しき者を見捨て給はぬお慈悲といふ處で、頂いて置かねば可かぬのであります。
(問者三) 私は只今の御講話で、「遣る處は唯佛智不思議」との御一言——信仰も何も無くなり、唯佛智不思議との御一言で、大に「らく」にさせて頂きました。

猶ほ伺ひ度きは、一寝ても醒めても南無阿彌陀佛を稱へるといふ事でありませぬ。私の親が家に居て絶えず念佛稱へますのを、私は今迄静坐法の代りに位に思つて居たのでありませぬ。然るに先き程の御講話で念佛の有り難きことを承はり、大抵は分つたのでありませぬけれども、猶ほ少し之につき御聞き度いと思ひます。

(答)御恩報謝の念佛でも「らく」にならせて頂けるのであります。此間も會つて學舎に勤めて居て、深くお慈悲を喜び「求道」に告白書いた婆やでありますが、其婆やが其後久しく病氣に悩み、先日も病體を抱へて私の宅にやつて來ました。私の處に滞在して居る中病氣が急にひどくなり、呻いて如何にも苦しさをうてあつたのであります。其中に私の顔を見て、「先生、ひと息さく」の御念佛が、此のひと息さくして浄土に參らせて頂く、かと思ふやうにありますが「言ひますから、何氣なく私は「然るか、かと思ふやうにありますが、外のこととはもう何うでもよい、御念佛一つが有難いな」と言ひますと、「ほんとに然うてよい、御念佛一つが有難いな」と言ひますと、「ほんとに居りました。すると二三日の間に、病氣がゆる／＼に「らく」になつて仕舞つた。御恩報謝の念佛なれど、其の稱へる念佛で氣づかせて貰うと、斯くからりと「らく」にならせて貰ふ爲めに稱へる念佛では無い。茲は「和讃」に佛法の本不思議には、諸邪業繁さはらねば、彌陀の本弘誓願を、増上縁となづけたり。

全くお慈悲の不思議であります。夫れ迄と雖も、婆やは頻りに念佛稱へて居たのでありますけれども、此時から念佛の稱へ方が違つて來たと、宅の者も申して居る。此の婆やは何か苦しくなると、私の處に逃げ込んで來るのであります。私のとこで別に親切にする譯けて無けれども、苦しい時はやつて來る。之が何かと言ひますに、此の婆やは今初めて氣づかせて貰うたのでは無い。疾うから非常に喜び、殊に五六年前病氣で死にかけた時など、極樂の音楽が聞えたこと迄喜んだ

のであります。夫れ程喜んで居るのであるけれども、何うかすると時々心が苦しくなる。すると又御恩報謝の念佛ですぐおのづと氣づかせて貰ひ、「らく」になるのであります。此のお慈悲の働きは、全く佛智不思議で、我々には到底測られぬ。故に此の不思議の御一言でも、御慈悲の廣大なることにも言へれば、我々罪深き何うにも仕て見やう無き場合にも言はれ、何うにても言はれるのである。現に聖人は先程も言ふ如く、四方八方詰つて仕て見やう無き場合に、「佛天の御計ひ」と御示し下されてあるのである。斯く有り難い事にも言はれれば、仕て見やう無き時にも御計ひを下さるのである。都合よき場合になると、私など餘り自分の思ふ事がバタ／＼思ひ通りに運んで、之は世界中自分の思ふやうになるかとさへ思ふ位な場合がある。私の郷里に一代で非常な資産を作つた金持があつて、人が「金の出來る時は、鐵で掘り起す程だつたらう」と尊ねたら、「それ位のことで此の財産が出来るものか、一時は金の山が背後から碎けて來るかと思つた」と話したといふ話があります。實際夫れ程に、前後左右バタ／＼と思ふ通りに運ぶ時がある。之れは不思議ぢや、全く佛天の御計ひがやと大得意で居ると、今度は具合が悪しくなり、人に親切にすれば却つて夫れを悪しくとられ、辯解すれば益々人に疑はれ、打ち明けて話せば、彌々人が誤解する。全く手も足も動かぬやうになつて來る時がある。斯る時に於ても、我が身の悪しさを懺悔して、「佛天の御計ひ、佛智の御不思議」と喜ばせて頂く事が出来るのであります。故に茲は、「此の世界の上に佛ましくして、此の世の有らぬ出來事は、此の佛がお慈悲の上より爲さしめて下さるので」といふ如き迂遠な事でも無しに、我々此世界の開閉通塞はあるも、其の開閉通塞に係はらず、設い何程境遇は塞つた場合に於ても、眞に其の者をお見捨て無きお慈悲一つが居て下さる事を、喜ばせて貰ふが眞にお慈悲を喜ぶものであります。(已上)

勸積德院大谷尊由師題辭
學赤松連城師跋文

本願寺派
梵唄奏斗
澤圓諦師章譜
二千部
價限

正大眞宗聖典

内容目次

梵唄讚佛會	十四行偈(第三寶傳)	報恩講式	口傳抄
重寶傳	入出二門偈(寶傳)	教心決定抄	執持抄
佛名。教化	正信念佛(中拍子)	教信儀大要	安樂抄
漢音阿彌陀經(假名)	高僧和讃(中拍子)	和讃阿彌陀經	七箇條起請文
佛說無量壽經	正佛和讃(中拍子)	和讃阿彌陀經	興一教起請文
佛說觀無量壽經	正佛和讃(中拍子)	和讃阿彌陀經	離山の御誓
佛說觀世音菩薩普門品	正佛和讃(中拍子)	和讃阿彌陀經	田植の御誓
佛說妙法蓮華經	正佛和讃(中拍子)	和讃阿彌陀經	御誓末の御誓
佛說法華經	正佛和讃(中拍子)	和讃阿彌陀經	御誓末の御誓
佛說法華經	正佛和讃(中拍子)	和讃阿彌陀經	御誓末の御誓
佛說法華經	正佛和讃(中拍子)	和讃阿彌陀經	御誓末の御誓
佛說法華經	正佛和讃(中拍子)	和讃阿彌陀經	御誓末の御誓

製本上等五寸
紙三寸六分
全三冊
金壹圓四拾
金壹圓四拾
金壹圓四拾

發行所

興教書院
京都市油小路御前通上ル
振替大阪一〇八一五番
電話下二六六七番

冠頭 歎異抄

第三版 信仰之餘瀝要畧

第六版 定價五錢 郵税四冊迄二錢

此の「歎異抄」は讀み易きよう字をまばらに植へ、校正を厳密になし、且つ冠頭を加へて諸聖教中より要文を引用し、叮嚀懇切に作りたるものなり。

久しく品切れの處今回出來仕候施本用として部數に應し割引仕候

發行所 求道發行所

東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京一六六九六番

近角常觀著

証正 唯信之歸途

第拾貳版
定價卅錢
郵稅四錢
袖珍美本

本書は著者が十餘年前端なく苦悶の暗黒界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歳の迷雲一時に消散したる時、自ら其心の經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、ひたすら内心の實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絶ゆる事なく、今や其十二版を出すに及び本書を縁として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所なり。而して先に第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に増補する處六篇あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附録として『予が信仰的實驗』なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根底は本書に於て明かならん。

懺悔錄 附録「歎異鈔」

第拾貳版
定價二十錢
郵稅四錢
袖珍美本

本書は著者が實験の信味に基づき従來求道者の金科玉條たる『歎異鈔』の真髓、惡人救濟の真意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歳以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と眼後に佛陀攝取の慈光に接して人生の異國順に一掃せる感謝の實感とを最も真率精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實験を開きて獄中安穩を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯 救濟の一途ある所以を可憐懇切に詳述したり。蓋し是れ『懺悔錄』の名ある所以にして一讀入信の人少なからず。
(懺悔錄久しく品切れの處今回第八版出来せり)

人生の信仰

第拾貳版
定價卅錢
郵稅四錢
袖珍美本

- ◎第一章 人生問題と信仰
- ◎第二章 悲觀思想と信仰
- ◎第三章 倫理力行と信仰
- ◎第四章 犯罪心理と信仰
- ◎第五章 社會問題と信仰
- ◎第六章 國家秩序と信仰
- ◎第七章 世界宇宙と信仰

本書内容は目次に示すが如し。先年『求道』秋季號として發行したるもの、近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため、再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は法律的教訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脱せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。

發賣行 東京市本郷區森川町一番地 振替口座東京一六六九六番 求道發行所

近角常觀編著書目

親鸞聖人の信仰

版貳
郵價七
口稅八十
綴錢錢

信仰問題

版六
菊郵定
版稅價
二百八十五
餘錢錢

冠頭 唯信 唯信鈔文意鈔

版初
施郵定
本稅價
用二冊七
迄二錢

施本用小冊子は部數に應じ充分割引す。

求道昨年度分合本

定價九十錢
郵稅八錢

當所は何書にても御都合により郵便集金法にて御注文に應じ可申候

申込所 東京市本郷區森川町一
振替東京一六六九六番
求道發行所

規定

本誌は毎月一回三十日發行とす
本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
凡て送金受取人名宛は「東京本郷區森川町一番地求道發行所」とせらるべし
本誌の講讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべし、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	一六ヶ月	一年
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢
			郵稅一冊に付五厘

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

大正二年五月十四日印刷
大正二年五月十七日發行

發行所

發行兼編輯人 近角常觀
東京市本郷區森川町一番地
求道發行所
(振替口座東京一六六九六番)

大賣捌所

東京市神田區 隆堂
東京市東區 隆堂
東京市北區 隆堂

前號要目

求 道

◎聖人の面影

◎善知識の恩

講 義

◎『教行信證』信卷三信釋

近 角 常 観

第 六 席

信樂釋(亦修念佛の意義)

告 白

◎懈怠勝ちと思はせて頂くと

亦格別有難い

丸 尾 猪 太 郎

講 話

◎佛智不思議

(親鸞聖人の消息)

近 角 常 観